

悪の花¹

完全無欠の詩人

フランス文学の完璧な魔術師

わが愛し尊敬する

師にして友

テオフィル・ゴーチエに

深き謹みの念をもって

この

病める花々を献じる。

C·B·

¹ 『悪の花』というタイトルは、ボードレールがカフェ・ランブランで皆と議論していたときに、友人のイッポリット・バブーによって提案された。

読者へ

愚かさ、過ち、罪、吝嗇²、

われらの頭を占領し、われらの体を痛めつける。

そうしてわれらは愛しい悔恨を養っている、

まるで乞食が蚤^{のみ}や虱^{のしらみ}を育むように。

われらの罪は頑固で、悔い改めはすぐにへたる。

やったことを告白し、たつぷりと見返りをもらい、

われわれは浮きうきと泥んこ道へ舞い戻る、

どんな穢^{けが}れも卑しい涙で洗い落とせると信じて。

悪の枕元にはサタン・トリスメギストウス³

うつとりしたわれらの精神を長ながとあやしてくれる。

² 吝嗇(りんしょく)・けちけちしていること。原文は *l'esine* (古語・文学語)。

³ 錬金術のヘルメス・トリスメギストウス(三倍(≡限りなく)偉大なヘルメス)をサタンに転用した呼称。

ひとの意欲は貴重な金属、だがそれも

この学識ある化学者によってすっかり蒸発してしまう。

〈悪魔〉が糸を操りわたしたちを動かしている！

われらはむかむかするものに魅力をみいだす。

日々、地獄へまた一步、われらは降りてゆく
恐れもなく、臭い闇をとおつて。

古い遊女のいじめぬかれた乳房を

貧しい放蕩者が舐めたり食べたりするように、

人目はばかり快樂をわれらはゆきずりに盗み
古びた蜜柑のようにそいつをぎゅつと搾る。

脳のなかでは、ひしめきあう何万匹もの蛔虫さながら

〈魔物〉たちの群が酒池肉林の大騒ぎだ。

息をすると、肺のなかに〈死〉は

降りてくる、みえない大河、にぶい嘆きの声をのせて。

われらのしよぼくれた運命、その凡庸なタピスリーの基布に
強姦、毒、ナイフ、火事が、愉快なそのデッサンを
まだ縫い取りしていないとしたら、
それはわたしたちの魂が、ああ！ まだ充分に大胆ではないから。

けれども、ジャツカル、豹、山犬、

猿、蠍、秃鷲、蛇、

喚き、吠え、唸り、這いまわる怪物たちにまじり、
われわれの悪徳のけがらわしい動物園に、

もっと醜く、もっと意地が悪く、もっと汚らしいやつがいる！
大げさな身ぶりもせず大きな叫びもあげないけれど、
その気になれば地球を瓦礫にし、
あくびしながらこの世を呑みくだしてしまおうだろう。

それは〈倦怠〉！ ——目にわれしらず涙をため、

水煙管みずぎせるふかしながら断頭台を夢みている。
きみはこいつをご存じだ、読者よ、この気むずかしい怪物を、
——偽善家の読者よ、——わたしの同類、——わたしの兄弟よ！

憂愁と理想

一 祝祷

至上の権力の命を受け、
退屈したこの世に〈詩人〉が現れると、
恐れおののいた母親は冒瀆の気持ちでいっぱいになり、
神に向かってこぶしをふりあげる、神は母を憐れみ給う。

——「どうせ産むなら蝮の子を産んだほうがよかったよ、
こんな笑い物を育てるくらいなら！
呪われる、ふらりと快樂におぼれた夜、
お腹なかに罪のあがないを宿してしまった！

——
この詩での詩人と母の母子関係は、聖母マリアと御子イエズスのパロディになっている。カトリックの聖母の祈りは、「めでたし、聖籠みちみてるマリア、主、御身とともにまします「…」である。

女のなかからあんたはあたしを選んだ。^ろ
おかげで、しんきくさい亭主には愛想をつかされるし、
といて、ねじくれたこの怪物を、恋文のように
火へ投げこもうたってそうもいかない。だったら

あたしをうちのめすあんたの憎悪を、こんどはこつちから
浴びせ返してやる、あんたの悪意を実行する呪われた道具。のうえにね。
こいつはみじめな木さ、うまい具合にねじあげて、
毒々しい芽を吹かないようにしてやるよ！」

こうして母は憎しみで泡だつ唾をのみこむ。
天の計画^{はからい}などさっぱりわからず、
ゲヘナの底にじぶんから

—
⁵ 聖母の祈りでは、「御身は女のうちにて祝せられ、ご体内の御子イエズスも祝せられたもう。天主の御母聖マリア、罪人
なるわれらのために、今も、臨終のときも祈りたまえ」。
⁶ 子である詩人を指す。
⁷ 永遠の業火が燃える地獄。転じて、身体的・心的な苛烈な苦しみ。

母の罪業を処罰する火あぶりの薪を準備する。

けれども、勘当された〈子供〉は

姿のみえない〈天使〉に庇護まもられ、太陽に酔いしれる。
目にするもの、口にするものすべてに

アンブローシアと深紅のネクター∞を見いだす。

風と遊び、雲と語らい、

歌いながら十字架の道行きに酔いしれる。

その巡礼にしたがう〈聖霊〉は

子供が森の小鳥のように陽気なのをみて涙をながす。

彼は愛そうと思うのに皆こわごと彼をみまもる、

あるいは、彼がおとなしいのをいいことに大胆になり

われさきに嘆きのひとつも引きだそうとし、

∞
ギリシヤの神々の食べ物（アンブローシア）と飲み物（ネクター）。

おのれの残忍さを彼のうえで試してみる。

彼が口にするはずのパンと葡萄酒に

灰と汚い唾をまぜ、

彼のさわったものは偽善的に投げ捨て、

彼の足あとを踏んだといつてはみずからを責める。

彼の妻は街の広場から広場へ声を張りあげながらゆく。

「わたしは崇めるに足る美しい女、あのひとはそう思っています、だからわたしは古代の偶像のお仕事をするの。

おなじように金ぴかにしてもらうのよ。

香油と、お香と、没薬と、

跪拝と、肉と、ワインに酔う、

そしてたしかめてやる、わたしを崇拜する心から、
神々しい讚美を笑ってくすね取れるかどうか！

罰あたりなお笑い劇をさんざんやって、それにも飽きたら、わたしは華奢で強いこの手をあのひとの上におく。ハルピユイアの爪にも負けないわたしの爪、心臓までいっぽんの道をきりひらいてゆけるはず。

雛鳥みたいにぴくぴくふるえる

真っ赤な心臓を、胸からちぎり取ってやる、

そして、軽蔑をこめて、地べたへなげつけてやる、

あたしの可愛いペットのおなかの足しにしてやるんだ！」

光輝く玉座の見える〈天〉へむかい、

晴朗な〈詩人〉はうやうやしく腕をさしあげる、

すると、明晰な精神からはりりである広やかな閃光のために、怒り狂う民衆の姿はその眼から隠されてしまう。

。——
ギリシヤ神話。頭は女、体は鳥の、鋭い爪を持つ怪物。

——「讃むべきかな、わが神、御身は苦しみをお与えになる。
われらの穢れを祓う靈験あらたかな手だてとして、
また、強き者を聖なる官能へ備える
最良の、このうえなく純粹な精髓として！」

わたくしは存じております、聖なる〈軍団〉のさきわう列のなかに
御身は〈詩人〉にもひとつの場所を設けてくださっている。
そして〈詩人〉を〈座天使〉、〈力天使〉、〈主天使〉の永遠の祝宴に
お招きくださるのだと。

わたくしは存じております、苦惱こそは唯一の高貴さ、
浮世も地獄もそこにはけつして歯がたたず、
また、わが神秘の冠を編むには
あらゆる時代あらゆる世界から貢をとりたてなくてはならないと。

——
それぞれ、天に九つある天使の隊の一つ。上から、セラフィム（熾天使）、ケルビム（知天使）、続いて座天使、主天使、
力天使、能天使、権天使、その下に、大天使、天使。最下位の天使が人間へ遣わされる。

けれども古代都市パルミユラの失われた宝石や、
未知の金属、海の真珠を、
たとえ御身手ずからお嵌めくださろうと、まばゆくあかるい
この王冠に充分とは申せません。

なぜならそれは生粋の光だけでつくられるのですから、
原初の光線あふれる神聖な竈から汲む光、
死を定められた人間の目は、どんなに燦然と輝くときにも、それを映す
曇って、嘆きがちな鏡でしかありません！」

二 あほう鳥

よく、気晴らしに、船の男たちは、
ひろやかな海鳥、あほう鳥をつかまえる。
あほう鳥はのんきな旅仲間、苦い深淵のうえを滑る
船のあとからついてくる。

甲板に据えられると、
この青空の王さま、恥ずかしそうにぎこちなく、
白い大きな翼を、まるで權カのように、
ずるずる両脇にみじめたらしくひきずっている。

翼のはえたこの旅人、なんてぶざまな、腑抜けなやつ！
さつきまであんなに美しかったのに、なんて滑稽で醜いんだ！
パイプで嘴をこづくのもいれば、もう飛べない鳥を

足をひきずり、真似るのもいる！

嵐に出入りし、射手を笑う

雲の貴公子に（詩人）は似ている。
地上に逐われ罵声にかこまれると、
大きな翼が邪魔になつて歩けない。

三 高翔

沼をこえ、谷をこえ、
山、森、雲、海をこえ、
太陽のむこう、エーテルのむこう、
星々のきらめく天球のむこうへ、

わが精神、おまえは敏捷に動く、
達者な泳ぎ手が波間でうっとりするよう
ふかい無限のなかを愉快によこぎってゆく、
なんともいえない男らしい官能にひたりながら。

飛べ、この病的な瘴気^ニを遠くはなれ。

ニ
微生物が発見されるまで、病気を引き起こす原因とみなされていた、腐敗物質から発散される悪気、毒気。

ゆけ、高い気圏へ身を浄めに、
そして飲め、神聖なきつすいの酒のように、
澄みわたる空間にみちるあかるい火を。

憂鬱やたくさんの悲しみが
霧ふかい生活にずっしりとしかかる、その裏で、
力づよくはばたき
光かがやくほがらかな野へ飛びたつ者は幸い。

思いが、朝、雲雀のように、
大空へ自由に揚がる者は。

——人生の上を舞い、苦もなく理解する者は
花と物言わぬ事物のことばを！

四 照応

〈自然〉は寺院、そこでは生きている柱が
ときおりおぼろなことばを洩らす。
人はそこをとおってゆく、象徴の森をぬって。
森も親密な眼ざしで人をみつめている。

夜のように光のようにひろやかな、
暗くふかい〈統一〉のなか
遠くからながい木霊こだまがとけあうように、
香り、色、音は応こたえあう。

子どもの肌のように爽やかな香りがある、
オーボエのように甘いもの、牧場まきばのように緑のもの、
——ほかに、腐った香り、ゆたかな香り、勝ちほこる香り、

はてしない事物のひろがりを持ち、
龍涎香、麝香、安息香、薫香のよう
に、
精神と感覚の熱狂を歌っている。

龍涎香は、マッコウクジラの腸、麝香はジャコウジカの雄の包皮腺からとれる。安息香は同名の木の木片や樹液からつく
くる。動物と植物由来の香りが、異なる秩序の融合を暗示する。

五

ぼくは好きだ、あの裸の時代の思い出。
太陽神は彫像を金色に染め愉しんでいた。
あの頃は、男も女も敏捷で、
嘘もなく不安もなく楽しんでいた。
愛にあふれる空はみんなの背骨を愛撫し、
高貴な身体機械の健やかさを鍛錬していた。
大地母神は、当時、優しい作物を豊かに産みながら、
じぶんの息子たちをそれほど厄介な重荷とは思っていなかった、
みんなへの優しさに心ふくらむ牝狼、
その茶色の乳房で世界を養っていた。
男は、優雅、壮健、屈強、じぶんのことを王と呼ぶ美女たちを
自慢に思う権利があった。

ローマ神話では、ローマ建国主ロムルスとレムスを、幼少時、牝狼が養った。

辱しめを受けていない、ひびの入っていない果物、
そのすべすべする締まった肉は、咬みつきたい気持をあおった！

今日（こんにち）〈詩人〉が、この生まれついでの大偉さを

男や女の裸を見られる場所で

思い描こうとすると、

恐怖でいっぱいのその黒い絵をまえにして

暗く冷えびえとしたものがたましいを包むのを感じる。

おお、服をもとめて泣いている奇形のものたち！

おお、笑止千万な胴！ 仮面をかぶるのにふさわしい胸部！

おお、ねじれた、痩せた、ほてい腹の、ぶよぶよの、哀れな体、

これらは、ものに動じない晴朗な（功利）の神が、

赤ん坊のうちに青銅のむつきにくるんだのだ！

それに、おまえたち、女よ、ああ！ 蠟燭のように青ざめ、

淫蕩に蝕まれ養われている、またおまえたち、処女よ、

母の悪徳をうけつぎそれを引きずっている

それに子沢山のありとあらゆる醜さも！

たしかに、ぼくら、腐敗した国民には、
古代人の知らない美女たちがいる。

心の潰瘍に蝕まれた顔、
憔悴の美ともいえるもの。

でもぼくらの遅ればせなミューズのこんな発明も
病める種族が青春にふかい賛辞を捧げることがを

けっして邪魔だてはしないだろう。

——素朴な風情、穏やかな額、

澄んだあかるい目はながれる水のような、聖なる青春。

空の青、鳥、花のように、屈託もなく、すべてのものへ広げてゆく、
その香り、その歌、そのやわらかな熱を！

六 灯台

ルーベンス、忘却の大河、怠惰の庭、
爽快な肉の枕、人はそこで愛することはできない、
けれども生命は滔々と流れ、絶えず奔騰している、
空のなかの空気、海のなかの海のように。

レオナルド・ダ・ヴィンチ、深ぶかど暗い鏡、
魅惑の天使たちが神秘にみちた微笑を浮かべ
かれらの国を閉ざす氷河と
松の陰に姿をあらわす。

レンブラント、ささやきに満ちた悲しい施療院、
ひとつだけ飾られている大きな磔刑の十字架。
涙にぬれた祈りがおおいのなかからたち昇る。

ふいに冬の陽が射し込んでくる。

ミケランジェロ、あいまいな場所、そこに見えるのは
キリストたちと混じりあうヘラクレスたち、そして
すつくと身を起こす力強い亡霊たち、薄明のなか
指をのばし経帷子をひき裂いている。

ボクサーの怒り、半獣神の淫らさ、
下賤な者の美をよく集め得た君、
傲りでふくらむ広い心、虚弱な黄色い男、
ピュージェ、徒刑囚の愁いに沈む皇帝。

ワットー、これは謝肉祭、浮き名も高い人々が、
きらきら、蝶のようにさまよっている。
爽やかな軽い舞台装置、この渦巻く舞踏会に、
シャンデリアが狂気を注いでいる。

ゴヤ、未知のものでいっばいの悪夢、
魔宴のさなかぐつぐつ煮られている胎児、
鏡にむかう老婆、悪魔を誘惑しようと
ストッキングをはきととのえる裸の女の子たち。

ドラクロワ、悪い天使の出没する血の湖、
常緑の杉の林が陰をおとしている、
そこを、陰鬱な空のもと過ぎてゆくのは不思議な金管楽器の音色
ウェーバーの押し殺した溜息にも似て。

この呪詛、この冒瀆、この嘆き、
この恍惚、この叫び、この涙、この「神への讃歌」は
千の迷宮が響きを返す一つの木霊。
人間の心のための神聖な阿片！

千人の歩哨が復唱する一つの叫び、
千のメガホンに送られる一つの指令。

千の砦ひとつひとつにともされた篝火、
ふかい森で道に迷う狩人たちの呼びあう声！

なぜなら、まことに、主よ、これは私たちが
みずからの尊厳について立てられる最良の証なのです、
世から世へとうねり、あなたの永遠の岸边に
たどりついては死ぬこの熱い啜泣きは！

七 病気のミューズ

ああ、かわいそうに、ぼくのミューズ、今朝はいったいどうした。
落ちくぼんだ眼には夜の幻がひしめいている。
みればきみの顔色の上にかわるがわる映っているのは
冷たく黙った、狂気と怯え。

緑の夢魔¹⁴と薔薇色の小悪魔¹⁵が
壺をかたむけ、ざぶざぶ、恐れと愛をきみに注いだのか。
それとも悪夢が、うむをいわさぬふざけた拳をふるい、
伝えきくミントウルナエの沼底¹⁶にきみを沈めたのか。

¹⁴ 夢魔・succube キリスト教神学で、女の姿になり男と性的関係を結ぶ悪魔。(Incubeは、寝ている間に女にいたずらをする男の悪魔。)

¹⁵ 小悪魔・Tutin 夜、人間や動物にわるさをする小悪魔。

¹⁶ ローマ市南方の沼。皇帝マリウスが追っ手をのがれその沼に身を隠した。

ぼくはきみの胸が健康の匂いを放ち
しつかりした考えをいつも宿していればと思う、
キリスト教徒の血が滔々たるリズムを打って

古の詞の節うるわしい音のように流れていれど。
それをかわるがわる治めるのは、歌の父、
太陽神と、偉大な牧神、穫入れの王。

八 金で身を売るミュージズ

わが心のミュージズ、宮殿を愛する女よ、
きみにはあるだろうか、〈二月〉が 〈北風〉を解き放ち、
雪ふる夜の黒い倦怠が続くあいだ、
紫色の足を暖める燃えさしのひとつも。

きみは斑まだらの浮いた肩を温めるつもりなのか、
鎧戸から洩れる夜の光にあてて。

口のなかはからから、財布も空なのを感じ
碧い夜空から黄金を収穫するとても？

夜ごとのパンを稼ぐには、聖歌隊の子どものように、
きみも香炉をふり、歌わなくてはならない、
ろくに信じてもない「神カミへの讃歌ツタエ」を、

それとも、空きっ腹の道化師、色気たっぷりには、
ひとには見えない涙にぬれた笑いをふりまかなくては、
俗衆どもの腹の皮をよじらせてやるために。

九 悪い僧侶

いにしへの僧院は大きな壁に
聖なる〈真理〉を絵に描き並べていた、
そのありがたさ、敬虔なはらわたは温もり、
峻厳な冷たさも和らいでいた。

キリストの蒔いた種が花咲いていたあの頃、
今では人の口にのぼることもほとんどない、名高い僧侶がひとりならず、
埋葬の野をアトリエに
純朴に〈死〉をことほいでいた。

——ぼくの魂は墓、永遠の昔から、
悪い修道士、ぼくはそこを駆け廻り、そこに住んでいる。

このおぞましい僧院の壁を美しくするものはなにもない。

ああ、なまけ者の僧侶^ニ！ いったいいつできるのだろう、
ぼくの哀しい惨めさの生きている光景から
ぼくの手になる仕事、ぼくの目の愛は。

——
草稿では、「不能のオルカーニャ」。この詩は、ピサのカンポ・サントのフレスコ画「死の勝利」を発想源のひとつとする。「死の勝利」は、かつてはアンドレア・オルカーニャ作とされていた。（現在では、フランチェスコ・トライニ作とされる）

一〇 敵

わが青春はそこかしこきらめく陽光のよぎってゆく
暗い嵐にすぎなかつた。

雷と雨に荒らされた庭に、
残っているのはほんのわずかな赤い果実だけ。

そして今、ぼくは、観念の秋に触れた。

熊手とシャベルを使って

水びたしの土地をもう一度あつめなくては。

墓さながらの大きな穴を水がいくつも穿^{うが}っている。

でも誰にわかるだろう、砂浜みたいに洗われたこの土のなかに
ぼくの夢みる新しい花々が

みずからの力となる神秘の糧^{かて}を見いだすかどうか。

——ああ、苦しい！ 苦しい！ 〈時〉が人生を喰らう。
そして怪しい〈敵〉は、ぼくらの心臓を噛じり、
ぼくらの失う血で肥えふとり、強くなる！

一一 不運

こんな重たさを持ちあげるには、
シーシュポス⁸、君の勇気が必要だろう！
心を込めて取組んでみても、
〈芸術〉は長く〈時〉は短い。

名高い墳墓⁹から遠く、
ひとりはなれた墓地へ、
ぼくの心は、鈍い太鼓のように、
葬送のマーチを打ってゆく。

⁸ギリシヤ神話。山頂に運んではふたたび落ちる岩をまた運び上げるといふ永遠の罰をゼウスから受けた。

——あまたの宝石、埋もれて眠る
闇と忘却のなか、
鶴嘴と測鉛¹⁶から遠く。

あまたの花、惜しみながら放つ、
秘密のように甘い香り
ふかい孤独のなか。

¹⁶
水中に投下し水深を測る器具。

一二 前世

わたしは長く住んでいた、広大な柱廊のもと。
海の太陽はそれをおびただしい火で染めていた。
太い柱は堂々とまっすぐに立ち
夕べには、まるで玄武岩の洞窟のようだった。

大波は空の映像をうねらせ、
ゆたかな音楽の力強い和音を
おごそかに神秘的に入日の色にませ、
わたしの目にそれが照り映えていた。

わたしはそこで生きた、静かな官能のうちに。
まわりには青空と、波と、輝き

そして裸の奴隷たち、匂いがきつく染みついて、

椰子の葉でわたしの額を扇いでくれた、

その気遣いはただ一つ、ふかめることだった
わたしを愁わせていたあの悩ましい秘密を。

一三 旅のボヘミアン

燃える目をした預言の族

きのう旅路についた、背中には

幼子を背負い、また、ひもじくてぐずるときには
垂れ乳にいつも一杯の宝をふくませて。

男たちは徒歩でゆく、きらめく武具をよろい

女子供のうづくまる荷車の脇を固めて。

目は空をさまよっている、そこにはない幻影を
鬱々となつかしみ重たげな目。

砂の巢の奥から、蟋蟀が、

通り過ぎるかれらを眺め、歌声を高める。

かれらを愛している大地母神は、緑を繁らせ、

岩清水をわかせ、砂漠に花を咲かせ、
この旅人たちを迎える。かれらに開か
れているのは
未来の闇のなつかしい帝国。

一四 人間と海

自由の人よ、君はいつも海をいとしむだろう！
海は鏡。君はじぶんの魂を
はてしなくうねりひろがる波のなかに見つめる、
その君の精神も苦さで劣る淵ではない。

君はじぶんの似姿のふところに飛び込むのが好きだ。
君はそれを目と腕で抱く、君の心は
ときおりじぶんのざわめきから逸れ
この御しがたい野蛮な嘆きの音にひきよせられる。

君たちはふたり暗鬱で口数もすくない。
人よ、君の深淵の底を測った者はいない、

海よ、君の奥深いゆたかさを知る者はいない、
それほどにも君たちはじぶんの秘密を守ろうと懸命だ！

その間にも数えきれぬ世紀は過ぎてゆき
君たちは憐れみも悔いもなく戦っている、
こんなにも殺戮と死を愛している、
永遠の闘士、血も涙もない兄弟よ！

一五 地獄のドン・ジュアン

地底をながれる波のほうへドン・ジュアンがおりてゆき
六道銭を渡守りのカロン²⁰に渡すと、
アンテイステネス²¹のようなきつい目をした陰鬱な乞食が、
ざまを見ろといわんばかりに太い腕で權を掴んだ。

垂れ乳もあらわな、服をはだけた女たちが
暗黒の空のもと身をよじっていた、
ながい唸り声が彼のうしろで尾をひいていた、
生け贄に供された家畜の群のように。

²⁰ギリシヤ神話。死者から六道銭をもらい、地獄のステュクス河とアケロン河を渡らせる。
²¹ギリシヤの哲学者。ソクラテスの弟子で、犬儒派の創設者。美徳によって幸福に至ることができると考え、芸術、贅沢、安逸を良くないものとした。

スガナレル²²は笑いながら給金を要求していた、
かたや、ドン・ルイ²³は、岸辺をさまよう亡者たちに、
ふるえる指でしめしていた
父の白頭をあざ笑う肝の座った息子のことを。

喪服に包まれふるえながら、清純な痩せたエルヴィール²⁴は、
裏切り者の、けれども恋人だった夫にすぎり、
はじめて契^{ちぎ}りをかわしたときの優しさが照り渡る
最後の微笑みをもとめているかのようにだった。

鎧兜^{よろい}に身を固め、昂然^{こうぜん}と、石の大男^{おおい}²⁵が
舵^{かじ}をあやつり、黒いうねりを切っていた。

²² ドン・ジュアンの従僕。モリエールの戯曲『ドン・ジュアン』の最後で、石の男に連れ去られ死者の国へ消えたドン・

²³ ジュアンのあとへむかい「おれの給金！」と叫ぶ。

²⁴ ドン・ジュアンの父。

²⁵ ドン・ジュアンが修道院から連れ出して結婚し、すぐに熱が冷めて捨てた妻。

²⁵ ドン・ジュアンが晩餐に招待し、彼に死をもたらした騎士の石像。

けれども静かな英雄は、すらりとした剣に身をもたせ、
航跡をじっと見つめながら、なにひとつ見ようとしなかつた。

一六 傲慢の罰

〈神学〉が、空前絶後のエネルギーと樹液にみちあふれ

花咲いていたあのおどろくべき時代、

こんなことがあったという、ある日、最も偉大な博士のひとりが²⁶、

——信者たちの無関心な心をむりやりこじあげ

黒い深みの底でそれをゆすぶったあと、

天の栄光へむかい

自分でもしらない不思議な道を越えていった、

²⁶ 「傲慢の罰」は、一八四八年十月十五日の『両世界評論』（一八四八年十月十五日）に掲載されたサン＝ルネ・タイヤン・デイエの論文記事に載っている中世の逸話が源泉とされている。十三世紀に、司教座聖堂参事会員シモン・ド・トゥルネが、公衆の前で聖三位一体の神秘について説明したあと、あまりにも満足したあげく、心おごって、キリスト教の真理は自分の論法の巧みに依拠していると口走った。するとふいに、彼は言葉の自由を失い、呆けてしまった。神罰がくだったのだ、という逸話である。

そんな道は、けがれの無い〈聖霊〉しか来たことはなかったろう——
高いところに登りすぎパニックになった男のように、
悪魔めいた驕りの気持ちに我を忘れ、叫んだそうだ。

「イエズスよ、ちっぽけなイエズスよ！ おまえをこんなに高めてやつ
た！」

だがな、その甲冑の破れ目を、このわしが、
一突きしようという気でも起こしていたら、今頃そなたの栄光は恥にひと
しく、

そなたはもはや笑い者の胎児でしかなかったはず！」

そのとたん、かれの理性は去ってしまった。

太陽のきらめきはヴェールに覆われた。

かれの知性のなかに混沌がうねった。

かつては生きた寺院で、秩序と豪華であふれていたのに、

その天井の下には栄耀が燦然と輝いていたのに、

沈黙と夜がそのなかに居座った、

鍵が失われた地下の穴蔵のように。

その時から、かれは路傍ろぼうの畜生とおなじだった。
なにも目にはいらず、夏と冬の区別もつかず、
野づらを越えてゆくときは、
廃品のようによごれ、役立たずな、醜みにくいかれを、
子どもたちは嘸はなしたて、笑いものにしたそうな。

一七 美

人よ！ わたしは石の夢のように美しい。
わたしの胸でみんな次々に傷ついたらけれど、それは
物質のように永遠で寡黙な愛を
詩人に吹き込むためのもの。

わたしは青空に君臨します、難解なスフィンクスのように。
わたしはひとつに結びます、雪の心と白鳥の白を。
線を動かす運動がわたしは嫌いです。
わたしはけっして泣きません、けっして笑いません。

いかめしい記念碑から借りてきたようにみえる
わたしの大いなる姿態の前で、詩人たちは厳しい研鑽^{けんざん}のうちに
日々を使い果たすでしょう。

なぜってわたしは、この従順な恋人たちを魅了するため、
すべてのものをより美しくする曇りのない鏡をもっているのですから。
わたしの眼、永遠の輝きを宿すこのひろやかな眼！

一八 理想

あの装飾模様的美ではないだろう、
ならずものの世紀から生まれた傷物の産物、
編上靴をはいたあの足、カスターネットをはめたあの指、
ぼくのような心を満足させてくれるのは。

ぼくは萎黄病の詩人ガヴァルニ^ニに、
施療院の美女たちのさえざる群をまかせよう、
だって見あたらぬのだ、色のうすいこの薔薇のなかには、
ぼくの赤い理想に似た一輪の花は。

深淵のようにふかいわが心に必要なのは、
君たちだ、マクベス夫人、犯罪につよい魂、

27 (1804-1866) 素描、リトグラフ、戯画家。とくに、貧しい人々を主題にしたパリ生活情景を描く。萎黄病は、鉄分の不足により皮膚が緑がかった色になる貧血病。

暴風の風土に花ひらくアイスキュロスの夢。

あるいは君だ、大きな〈夜〉²⁸、ミケランジェロの娘、
奇怪なポーズをとって安らかによじっている、
タイタン族の口にあわせたきみたちの色香を！

²⁸ ミケランジェロ作の彫像。フィレンツェ、サンロレンツォ教会礼拝堂にある。

一九 女巨人

〈自然〉が力強い趣向をこらし、
怪物めいた子どもを毎日はらんでいた頃、
ぼくなら暮らしてみたかった、若い女巨人のそばで、
あたかも女王の足もとに暮らす官能的な猫のように。

彼女の体が魂と一緒に花ひらき

おそろしい遊びをしながら自由に大きくなるのを見てみたかった。
眼のなかに泳いでいる濡れた霧をとおして

見抜いてみたかった、心が暗い炎を抱いているかどうか。

彼女のみごとなたちのうえを気ままに駆け回り、

なみはずれて大きな膝のなぞえによじ登り、

ときには、夏、不健康な太陽が、

ぐったりした彼女を野にながながと横たえるとき、
その乳房の蔭に心おきなく眠ってみたかった、
山のふもとの平和な村のように。

二〇 仮面

ルネサンス趣味の寓意的彫刻

彫刻家エルネスト・クリストフ²⁹に

フィレンツェ風の優雅なこの宝ものをじっくり見てみよう。

これは筋肉質なからだで、そのうねりのなかに

神々しい姉妹である〈雅び〉と〈力〉があふれている。

じつに奇跡的な作品だ、

神々しいまでに逞しく、うっとりするほど細身の女。

豪華なベッドのうえで君臨し、

高位聖職者や君主の閑を慰めるのにふさわしい。

²⁹ (1827-1892)。フランスの彫刻家。『一八五九年のサロン』で、ボードレールは彼の彫刻作品『仮面』についての美術批評を書いている。

——それに、ほら、こまやかで官能的なこの微笑み
〈自惚れ〉がうっとりとして漂っている。

ずる賢く、けだるく、蔑むようなこの切れ長の眼差し。
可愛らしい顔は薄ぎぬに包まれ、

そのラインのどれもが勝ち誇ったようにぼくらに言っている。

「〈官能〉が私を呼んでいる、〈恋〉が私に冠を授ける！」

これほどの威厳を恵まれているこのひとに、

見ろよ、優しさがどんなに刺激的な魅力を与えていることか！
近づいてみよう、この美女のまわりを回ってみよう。

おお、芸術にたいする冒瀆だ！ あきれてしまおう！

神々しいからだをして、幸福を約束していた女が

双頭の怪物になっている！

——さてよ！ これは仮面、ひとをだます飾りにすぎない、

洗練された見せかけ³⁰に照らされたこの顔。
ほら、よく見ろ、ここに、はげしくひきつっている
ほんとうの頭がある。嘘をつく顔にかくれ
のけぞっている誠実な頭。

かわいそうな大柄な美女！ 君の涙の壮麗^{そうれい}な大河が
気をもむぼくの心のなかに流れ込んでくる。
君の嘘はぼくを酔わせる、〈苦惱〉がその眼から
あふれさせた波のうねりにぼくの魂はうるおう！

——でもどうして彼女は泣いているんだ。完璧な美女で、
打ち負かした人類を足もとに従えることもできそうなほどなのに、
どんな不思議な苦痛がその鍛えぬいた脇腹を噛むんだろう。

——彼女が泣いているのは、ばかめ、それは彼女が生きたからさ！
生きているからさ！ でもなによりもつらくて涙が出るのは

³⁰ grimace : TLF B. Au fig., dépréc. 1. Gen. au plur. Comportement feint et ridicule.

膝までがくがく震えるのは、
それは明日も、なんてこった！ まだ生きなくてはならないから！
明日も、あさっても、いつまでも！ ——おれたちのように！

二一 美への讃歌

天のふかみからきみは来たのか、それとも地底から出てきたのか、
〈美〉よ。地獄的でもあれば神々しくもある
その眼差しは、善い行いと犯罪をごちゃまぜにしてそそぎ、
そのためにきみをワインにたとえることもできる。

きみはその瞳のなかに夕日と曙をふくんでいる。

きみは荒れ模様の夕べのように香りをうちひろげる。

きみの口づけは媚薬、きみの口は壺

そのおかげで英雄は意気地なしに、子どもは勇敢になる。

黒い深淵から出てきたのか、天の星から降りてきたのか。

魅惑された〈運命〉がきみのスカートのとを犬のように追いかける。

きみはでたらめに喜びと災厄とをまき散らし、
すべてを統率しながらなんの責めも負わない。

〈美〉よ、きみは死者たちの上を歩く、軽蔑しながら。

きみの宝石類のなかで、〈恐怖〉も魅力でおとりはしない。

〈殺人〉は、きみの大切な装身具のひとつ、

きみの傲慢な腹のうえでなまめかしく踊っている。

きみは蠟燭。まぶしさに眩んだ蜻蛉が、きみのほうへ飛んできて、

ばちばちはぜ、燃えあがり、そして言う。このたいまつを祝福しよう！

美しい女へ息もたえだえに身をかたむける恋する男は

じぶんの墓を撫でまわす瀕死の男にそっくりだ。

天から来ようと地獄から来ようと、それがどうした、

〈美〉よ！ けたはずれの、恐ろしい、天真爛漫の怪物！

もしもその眼が、微笑みが、足が、ぼくに、好きなのにまだ知る機会をも
たない

〈無限〉の扉を開いてくれるなら。

サタンから来ようと神から来ようと、それがどうした。天使なのかセイレンなのか、

それがどうした、もしきみが——天鵝絨セーターの眼の妖精よ、リズムよ、香りよ、光よ、わが唯一の女王よ！——

この宇宙を今よりもおぞましくなく時の重みを今よりも軽くしてくれるのなら。

二二 異国の香り

秋の暑い夕べに、両眼を閉じ

ぼくは匂いをかいでいる、きみの熱くほてった乳房、
するとぼくには見えてくる、単調な陽の炎でまぶしい
幸福な岸辺のひろがってゆくのが。

ものぐさな島、そこに自然は

珍しい木々とおいしい果物を恵んでいる。
痩せた精悍なからだの男たち。

びっくりするほど素直な目の女たち。

きみの匂いに魅惑の風土へ導かれ、

いまもなお海の波にもまれぐったりしている
帆とマストでいっぱい港が見えてくる、

そのあいだにも、緑のタマリンドの香りは
大気をめぐりぼくの鼻の穴をふくらませ、
たましいのなか水夫の歌と混じりあう。

二三 髪

ゆたかな髪の毛！ 羊毛のように縮れてふさふさと頸にまで！
巻き毛！ おお、けだるさを満載した香り！

エクスタシー！ 今宵、ほの暗い閨房を

髪に眠る思い出で一杯にするために、

ぼくはハンカチのようにそれを宙に打ち振りたい！

もの憂いアジアと燃えるアフリカ、

はるかな、ここにはない、ほとんど死んだ世界がそつくり、

きみの深みに生きている、かぐわしい森よ！

ほかの人たちの精神が音楽のうえを漕いでゆくように、

ぼくの精神は、恋人よ！ きみの香りのうえを泳ぐ。

ぼくはあそこへ行こう、木と人間が樹液にあふれ、

熱い気候のもとながくうっとりしているところへ。
力強い編髪よ、ぼくを運びさる大波になれ！
きみは黒檀の海、帆と漕ぎ手と吹き流しとマストの
めくるめく夢をふくんでいる。

響きのよい港、ぼくの魂はそこでたっぷり
飲むことができる、香りと音と色を。

船は金とモワレのうえを滑るように進みながら
ひろやかな腕を開く。永遠の熱のふるえる
純粹な空のほまれを抱きしめようと。

ぼくは沈めよう、酔うのがすきなぼくの頭を
もうひとつの海が閉じこめられているこの黒い海のなかに。
横揺れに愛撫され、ぼくのこまやかな精神は
きみたちをふたたび見いだすだろう、おお、豊穡なる怠惰よ、
よい匂いにみちたのどかさの果てしないゆすぶりよ！

青い髪の毛、闇を張った四阿、
ぼくはきみから円く大きな空の青をうけとる。
よじれた髪の毛の和毛のほとりに
ぼくは熱く酔いしれる、椰子油と麝香と瀝青の
とけあう匂いに。

ながく！いつまでも！ぼくの手はきみの重いたてがみのなかに
ルビーとサファイアと真珠を撒こう、
きみがぼくの欲望に耳をふさいでいないように！
きみはぼくがそこで夢みるオアシス、思い出の酒を
ゆつくりあじわいながらのむ瓢箪ではないだろうか。

二四

夜の天空のようにぼくはきみをあがめる、
悲しみの器よ、大きくて寡黙なひとよ。

逃げるからいつそう、美しいひとよ、きみを愛する、

青い無限からぼくの腕を引きはなすへだたりを

なおも皮肉に重ねるように見えるので、夜の飾りよ、いつそうきみを愛する。

ぼくは攻めよせ、よじ登り突撃する、

死体にむらがる蛆の聖歌隊のように、

そしてぼくは、冷酷非情な残忍なけだものめ！

その冷たさまでもがいとおいしい、冷たいためにさらにいつそう美しいから！

二五

おまえは全宇宙をまるごと寝室に引きずり込むだろう、
けがらわしい女め！ 倦怠のせいでおまえの魂は残酷になっている。
おまえの齒にこの風変わりな遊びを仕込むには、
毎日餌として心臓がひとつ必要だ。

おまえの眼は、まるでブティックのように、
また、祭りで燃える灯明とうみょうのように輝いている、けれども
そこでおまえの眼がずうずうしく使っているのは借り物の力、
その美しさの法則をおまえの眼はけっして知ってはいない。

目も見えず、耳もきこえない機械、残酷さだけはたっぷりある！
健康によい道具、世界の血をたらふく飲むもの、
おまえは恥ずかしくないのか、あらゆる鏡の前で
じぶんの色香がおとろえるのを見なかったのか。
この悪にかけてはおまえはじぶんのことをやり手だと思っている。

その悪の大きさは、おまえを恐怖で後ずさりさせなかったのか、

自然が、隠された計画を持つ大いなる自然が

おまえを、女よ、罪の女王よ、

——おまえを使って、いやしい動物よ、——ひとりの天才をこねあげるとき。

おお、泥まみれの偉大さ！ 崇高なる恥辱！

二六 SED NON SATIATA³¹

夜のように褐色の、奇妙な女神、
ハヴァナ葉巻と麝香のまじった香り、
草原のファウストか、それとも、魔法使いの作品、
黒檀の脇腹の魔女、黒い真夜中の子ども。

ぼくは、コンスタンス酒³²や、阿片や、ニユイ酒³³よりも、
愛が気取って歩いているきみの口の妙薬が好きだ。
ぼくの欲望はキヤラバンを組み、きみへむかって出発する。
きみの眼はぼくの倦怠がそこから飲む貯水桶。

³¹ 「サレド飽キ足ラズ」。ラテン詩人ユウエナリスの『風刺詩集』第六歌に、淫奔な王妃メッサリナが売春宿へ行って春を
ひさぎ、「男たちを相手に疲れ果てた、けれど飽き足りず (sed non satiata)、出て行った」とあるのに拠る。

³² コンスタンス酒 南アフリカ喜望峰産のワイン。

³³ ニユイ酒 ブルゴーニュ地方、ニユイ＝サン＝ジョルジュのワイン。

大きなそのふたつの黒い眼、きみの魂の通風口から、
容赦ない悪魔よ！ ぼくに注ぐ火を手加減してくれ。
ぼくはきみを九度抱く黄泉ステュクスの河スチクスではないのだ、

ああ！ それにぼくは、奔放なメガイラ、
きみの勇気をくじき、きみを吠えさせようとして
寝台地獄のなかでプロセルピナになれはしない！

34
ステュクス河 (Le Styx) は地獄を九巡り取り巻いて流れている。

二七

波のようにゆれる真珠母色の衣装を着て、
歩いていても彼女は踊っているかのようだ、
聖なる蛇使いが拍子おかしく棒の先で
あやつる長い蛇のよう。

あたかも砂漠の陰気な砂と青空が
人間の苦しみになんの感情も示さないように、
海ばらの波のながながしい網のように、
彼女は無関心に広がってゆく。

よく磨かれたその眼は魅力的な鉱物でできている。
奇妙で象徴的なその性質、
犯されていない天使が古代のスフィンクスと混じり合い、

いっさいはただ黄金、鋼、光、ダイヤモンド、
そのなかで、永遠に輝いている、役立たずな星のように、
子を産まぬ女の冷たい威厳。

二八 踊る蛇

愛いとしいのんきなひとよ、

きみのからだは美しく、

ぼくは見ているのが好きだ、ゆらめく
布のようにきらめくその肌！

ひりひりする香りの

ふかぶかとした髪の毛、

匂いたちあてどなく揺れる海、

青と褐色の波のうねるその上で、

朝風が目ざめる

帆船はんせんのように、

ぼくの夢みるたましいは
遠い空へと出帆しゅっはんする。

甘さも苦さも何ひとつ

姿を見せない、きみの眼は、

冷たいふたつの宝石、黄金と鉄が

まじりあっている。

きみがリズミカルに歩くのを見ると、

屈託くつたくのない美女よ、

まるで棒の先で

踊る蛇のよう。

けだるさの荷をのせ

きみの子どももっぽい頭は

若い象のように

なよやかに揺れる、

そうして体はかたむき、横になる、

ローリングして
帆桁^{ほげ}を海に沈める
すらりとした大型船のように。

とどろきながら氷河が溶け
水量のます流れのように
きみの口の水が
歯のほとりに高まると、

ぼくはボヘミアの酒を飲む思い、
勝ちほこる、苦い
液体の空、ぼくの心に
星々を撒き散らす！

二九 腐屍

ぼくたちの見たものを覚えていますか、恋人よ、

穏やかなあの夏の朝、

小径の曲がり角に、腐ったきたない屍体が、

小石をまいたベッドの上

脚を宙にむけ、みだらな、あつく燃えた、

毒のしみでる女のように、

なげやりな、シニカルな様子で

臭いの詰まった腹をひらいていました。

この腐敗物のうえに太陽が輝いていました、

まるでこんがり焼こうとでもするかのように、

それまでひとつに結びついていたものを

偉大な〈自然〉へ百倍にして返そうとでもするかのように。

空は極上の骸が一輪の花さながらに

咲きほころぶのを見つめていました。

悪臭はともひどく、あなたは、草のうえで

気を失いそうになりました。

この腐った腹にたかり蠅がぶんぶん唸っていました、

そこから蛆虫の黒い大群が続々と

くりだし、まるでねばっこい液体のように

この生き生きとしたぼろきれにそって流れていました。

すべては波のように、降りたりのぼったり、

ぴちぴちはねたり跳んだりしていました。

まるでこのからだは、おぼろな息吹をうけてふくらみ、

増殖しながら生きていてもいうようでした。

この世界から奇妙な音楽がきこえていました、

まるでせせらぐ水や風のような、
それともリズムカルな動きで箕を篩うひとが
あおって、くるりと回す箕のなかの穀粒のような。

形は消えてゆき、もはや夢でしかありませんでした、
なかなかやってこない下絵、
画布のうえに忘れられた下絵、それを芸術家は
思い出にのみ頼って完成させるのです。

岩の背後に、心配そうな牝犬が一匹、
ぼくたちを怒った眼で睨んでいました、
手放してきた肉片を骸骨からとり戻す
機会を窺いながら。

——あなたもやはり、この汚物と同じになるのです、
おぞましいこの悪臭と。
ぼくのみつめる星、ぼくの自然の太陽

あなたも、ぼくの天使よ、情熱よ！

そう！ こうなります、優美の女王よ、

臨終の秘蹟も終わり、

たつぷりと草の生えた花咲く地面のしたにあなたがおもむき
骨たちのあいだで黴だらけになるとき。

そのときは、おお、美しいひと！ 口づけしながら

むしやむしやあなたを食べる蛆にむかって言ってください、
こわれてしまった愛の形と神聖な精髓は、

このぼくが守ったと！

三〇 深キ淵ヨリ叫ビヌ

わたしの心がおちてしまった暗い淵の底から
きみの隣れみを請います、ただ一人愛するひとよ。
ここは陰鬱な世界、鉛色の地平線にとり巻かれ、
恐怖と冒瀆が夜のなかを泳いでいます。

熱のない太陽が六ヶ月天を舞い、
のこりの六ヶ月は夜が大地を覆っています。
ここは北極よりも裸の国。
獣も、小川も、緑も、森もない！

氷の太陽の冷えきった酷さと、
古い〈混沌〉にも似たはてしない夜、
これにまさる恐ろしさはこの世のどこにもありはしない。

わたしには嫉ましい、愚かな眠りに沈みこめる
卑しい獣の運命が。
それほどにも時の苧環はのろりのろりと糸を繰る！

三一 吸血鬼

ナイフの一突きのように
きみは入ってきた、嘆いているぼくの胸のなかに。
きみはやって来た、むれなす悪魔のように強く、
狂って、着飾って。

おとしめられたぼくを精神を
きみのベッド、きみの領土とするために。
ぼくは結びついていて、いやらしい女に、
囚人が鎖に結びついていてるように、

賭事かけごとに意地っぱりな賭事師が、
酒瓶に酔っぱらいが、
蛆虫に腐った死体が結びついてるように。
呪われろ、呪われるおまえなんか！

ぼくは手早い剣に
自由の回復を頼んでみた、
あぶない毒に
臆病の手助けをしてくれと言った。

哀れ！ 毒と剣は

ぼくを蔑み、こう言った。

「おまえを、のろわれた奴隷の身分から
ひき抜いてやっても割にあわねえ、

この馬鹿！ ——あいつの支配から

俺らが一肌脱いでお前を解放してやっても、

じぶんから口づけして生き返らせてしまうだろうよ
おまえを啜る吸血鬼の死体をさ！」

三二

ある晩、ぼくは、うす気味悪いユダヤ女のそばに、
死体によりそう死体のように横たわっていた、
するとふいに夢想された、この売られた肉体のそばで、
ぼくの欲望がみずから身をひいている悲しい美女のこと。

ぼくは思い描いた、その生まれながらの威厳、
生命力と優雅さとで鎧われたその眼差し、
香りのよい兜そっくりなその髪の毛、
こうして思い出すうちに、ぼくは恋へとかき立てられる。

なぜなら、きみの気高いからだをぼくは熱烈に貪っただろう、
爽やかな両足から黒い編髪まで
ふかい愛撫の宝を繰り広げただろう、

もしも、ある夜、勞せず手に入れた涙で
きみが、おお、つれなさの女王よ！ 冷たい瞳の光を
曇らせることさえできるのなら。

三三 死後の悔恨

きみが、暗い美女よ、黒大理石づくりの
奥津城ふかく眠るとき、
そして閨房や館のかわりに
雨ふりしきる洞窟とうつろな墓穴しかないとき、

こわがりなきみの胸と、のんびりした魅力を持つ
柔らかな脇腹を、石がおさえつけ、その石のために
心臓は鼓動や意欲を、そして足は
恋の冒険へ駆け出してゆくのをさまたげられる、そんなとき、

果てしないぼくの夢の相談相手、墓は

(なぜなら墓はいつも詩人を理解してくるから)
眠りの追い出されたこの大きな夜のあいだじゅう、

きみに言うだろう。「不完全な娼婦よ、死んだ者たちが
なにを思って泣いているのか知らなかったと行って、いまさら何に
なる」

——そして蛆虫はきみの皮膚を悔いのように噛じるんだ。

三四
猫

おいで、ぼくのきれいな猫、恋をしている心のうえに。

足の爪はひっこめ、

おまえのそのきれいな眼に、金属と瑪瑙のまじる眼に

ぼくをひたらせておくれ。

ぼくの指が気ままにおまえの頭や

弾力のある背中を撫でていると、

ぼくの手が電氣をおびたそのからだに触れている快樂に

酔っていると、

心のなかに見えるんだ、ぼくの妻が。その眼は、

おまえのとおなじで、いとしい猫よ、

深く、冷たく、銚もりのように切り裂き、抉えぐる。

その足先から頭まで、
微妙な空気、危険な香りが
褐色のからだをめぐり泳いでいる。

三五 一騎打ち

戦士がふたり互いに追いかけてあつた。その武器は
火花と血で空気をよごした。

この勝負、鉄のかちかち鳴りあうこの音は、
騒がしい愛にとらわれた青春の喧噪。

刀は折れた！ われらの青春のように、
恋人よ！ けれども齒ととがった爪が
すぐに剣や裏切り者の手刀の仇をうつ。

おお、愛に深手を負った熟れた心の烈しさよ！

山猫や豹の出没する溪谷を

われらの主人公は、意地悪く組み合いながら、転げていった、
かさかさの茨にかれらの皮膚は花をつけてやるだろう。

——この深淵、それは地獄、われらの友人でいっばいだ！
悔いもなくそこへ転げこもう、ひとでなしの女丈夫よ、
われらの憎しみのはげしさを永遠のものとするために！

三六 バルコニー

思い出を産みだす母よ、恋人のなかの恋人よ、
おまえはぼくの快樂のすべて！ おまえはぼくの義務のすべて！
おまえは思い出すだろう、うるわしい愛撫を、
優しい暖炉のほつりを、魅惑の夕べを、
思い出を産みだす母よ、恋人のなかの恋人よ！

燃える炭火に照り映える夕べ、
薔薇色の靄に包まれたバルコニーの夕べ。
おまえの胸はふっくりしていた！ その心は善良だった！
ぼくたちはよく不滅のことを語った、
燃える炭火に照り映える夕べ。

暑い夕べに太陽は美しく！

空間はふかく！ 心は強く！

おまえのほうへ身をかたむけると、恋人のなかの女王よ、

ぼくは血の香りをかぐような気がした。

暑い夕べに太陽は美しく！

夜は壁のように厚みをましていった、

けれどもぼくの眼は闇のなかでおまえの瞳を見分けていた、

ぼくはおまえの息を飲んだ、それは甘かった！ 毒だった！

おまえの足はきょうだいのようなぼくの手の中でまどろんでいた。

夜は壁のように厚みをましていった。

ぼくは幸福なときを喚びおこす術すべを知っている、

そしておまえの膝にまるまって過去をもう一度生きる。

おまえのけだるい美しさを、いとしいおまえのからだや

優しいおまえの心とはべつのところにもとめても何になろう。

ぼくは幸福なときを喚びおこす術を知っている！

この誓い、この香り、この限りない口づけ、

ふたたび生まれるのだろうか、ぼくらには測ることを禁じられてい
る深淵から、

ちようど深海の底でよごれを落とし

若返った太陽が、空へのぼってゆくように？

——おお、誓い！ おお、香り！ おお、限りない口づけ！

三七 憑かれた男

太陽は喪のヴェールに覆われた。おなじように、
おお、わが人生の〈月〉よ！ おまえもその身を影にくるめ。
眠りたければ眠り、タバコをすいたければ吸え。口をつぐみ、暗くなり、
〈倦怠〉の淵にどっぷりと沈み込め。

そんなおまえが好きだ！ でも、今日、もしおまえが、
隠れていた月が薄闇を出るように、

〈狂気〉の充満する場所をこれみよがしに歩きたいなら、
それもいい！ 素敵な七首よ、鞆から走りでるといい！

おまえの瞳にシャンデリアの炎で火をともせ！
ならず者の眼の中に欲望の火をともせ！

おまえのすべてがおれの快樂、病んでいようとぴちぴちしていようと。

おまえの好きなようにしていればいい、黒い夜、赤い夜明け。

ふるえるおれの体のなかで叫ばぬ神経は

一本もない、「おお、おれのベルゼビュット³⁵、おまえが大好きだ！」

35 悪魔の頭領

(the devil in the modern worldに注あり Nervalからの引用あり)

三八 幽霊

一 闇

はかり知れない悲しさにみちた地下納骨堂のなかへ
〈運命〉はすでにわたしを追放してしまった。
薔薇色の陽気なひかりの一筋も入ってこない。
鬱陶しい女主人である〈夜〉と、ふたりきり、

わたしは、ああ！ からかい好きな〈神〉が
闇のうえに絵を描けと罰したもうた絵描きのようだ。
不吉な食欲をもつ料理人、わたしはここで、
じぶんの心臓を煮て食べている。

ときおり、輝き、身をのぼし、横たわる
優雅さと栄耀からなる亡霊。

その東洋的な、夢みるような姿態が

完全な大きさに達するとき、

わたしは美しい訪問者を見とめる。

〈彼女〉だ！ 黒い、それでいて、光にあふれている。

二 香り

読者よ、きみもときには嗅いだことがあるだろうか、
酔いしれながら、ゆつくり味わいながら、
教会をみたす、あの薫香の粒を、
あるいは、匂い袋にしみついた麝香の香りを。

ふかい、魔法のような魅惑、ぼくらを
酔わせてくれる、現在のなかに復活した過去！
そんなふうには恋人は愛する体のうえで
馥郁^{ふくいく}たる思い出の花を摘む。

弾力のある重い髪の毛、
それは生きた匂い袋、閨房の香炉、そこから立ちのぼっていた、
人なれない野獣の匂い、

そしてモスリンか天鵞絨か、生粹の若さがすみずみまで
染み込んだ服から発散していた、
毛皮の香り。

三 額縁

たとえ巨匠の筆になる絵であろうと、
広大な自然からそれを切り離すことで、美しい額縁は、
絵になにかしら奇妙な、
魔法のようなものを加える、

そのように、宝石、家具、金属、金泥が、
珍しい彼女の美しさにぴったりしていた。
完璧なその耀^{きらめ}いを曇らせるものは何もなく、
すべてが縁飾りの役に立っているように思われた。

すべてがじぶんを愛したがっているのだと
彼女は思っているとさえ言えそうなこともあった。
彼女は裸のからだを官能的に沈めていた、

繻子サテンと肌着の口づけのなかに、
そして、ゆっくりと、あるいは急に、動くたびに
猿のようなあどけない愛嬌をみせていた。

四 肖像

〈病氣〉と〈死〉は灰にする

ぼくらのために燃えてきらめいた炎のすべてを。

とても熱烈で柔らかなあの大きな眼、

ぼくの心が溺れたあの口、

慰めのように強力なあの口づけ、

光よりも潑刺としたあの陶醉、

そのなに残っている。おそろしいことだ、魂よ！

三色の鉛筆で描いた、とても色あせたデッサンが一枚だけ、

それも、ぼくとおなじく、孤独のうちに死んでゆく。

黒、赤、白。

侮辱的な老人、〈時〉が、
ざらざらした翼で毎日それをこすっている……

〈人生〉と〈芸術〉の黒い殺し屋
けっしておまえに殺させはしない、ぼくの記憶のなかで、
わが快樂、わが栄光であつたひとを！

三九

きみにこの詩句を贈る、もしもわたしの名が
幸いにも遠い時代の岸边にたどりつき、
ある夕べ、人間の脳髓に夢をみさせるようなときには、
ゆたかな北風に恵まれた船、

すなわちきみの記憶が、おぼろなおとぎ話にも似て、
読者を、ツインバロム²のように、ぐったりさせ、
そうして親身な神秘的な鎖の環によって
わが高邁な脚韻にぶらさがっていられるように。

Ⓔ 台形の箱に弦を張って小さなハンマーで叩いて音を出す楽器。中世に広く用いられた。ピアノの原型。

ふかい淵から天の最上の高みまで、わたしのほかに
なにひとつ、応答しない、呪われた存在よ！

——はかない跡をのこす幽霊のように、

軽やかな足どりと澄んだ眼差しで

きみに辛くあたった愚かな人間たちを踏みつけているきみ、
漆黒の眼の彫像よ、青銅の額もつ大天使よ！

四〇 SEMPER EADEM³⁸

「どこからあなたにやって来るの」とあなたはきいた、「この奇妙な悲しみは、黒い裸の岩の上に満ち潮のようのにぼってくる」

——わたしたちの心が、ひとたび摘み入れを終えたら、生きるのは悪なのです。それはだれにでも知られている秘密、

とても単純な苦しみで、すこしも不思議なところはない、

それに、あなたの喜びとおなじで、だれが見てもはつきりわかる。

だから詮索はおよしなさい、好奇心旺盛な美しいひと！

あなたの声は甘くても、黙っていてください！

黙っていてください、無知なひと！ いつもうつとりしている魂！

³⁸ラテン語。「いつも同じく」

子どもつぽく笑っている口！〈生〉よりもつと、

〈死〉のほうがわたしたちをしばしば微妙な絆でとらえています。

どうか、わたしの心を〈嘘〉に酔わせてください、

美しい夢想到にひたるように美しいあなたの眼にひたらせてください、
あなたの睫毛の蔭にながくまどろませてください！

四一 彼女のすべて

今朝ぼくの屋根裏部屋に

〈悪魔〉がやって来て、

うまく尻尾をつかもうとして

ぼくに言った。「ちよつと聞きたいんだけど、

あのひとの魅力になっている

いろんな美しいものがあるだろう、

あの素敵なかからだをつくっている

黒やバラ色のもの、そのなかで、

どれがいちばん甘美なんだ」——おお、わが魂よ！

おまえは〈嫌われ者〉に答えた。

「〈彼女〉のなかのすべてが慰めだ、
だからどれというわけにはいかない。

すべてに心を奪われ、ぼく自身にもわからないなにかに惑わされているのかどうかも。

あのひとは〈夜明け〉のようにまぶしく

〈夜〉のように慰撫してくれる。

美しいからだのすみずみに、

調和がいきわたっているけれど、靈妙すぎて、

分析しようにも、響きあう音のしらべを

ひとつひとつとりだしてみることはできない。

おお、全感覚がひとつに溶けた

神秘的なメタモルフオーズ！

彼女の息は音楽になり、

その声は香りになる！」

四二

今宵、どういえばいいのだろう、ひとりぼちの哀れな魂、
どういえばいいのだろう、前には萎れていた心よ、
美しく、善良な、愛しいあのひとに。

その神々しい眼ざしにおまえはふいにまた花やいでいる。

——ぼくたちは誇らしく彼女のほめ歌を歌おう。

威厳にみちたあの優しさにかなうものは何もない。

あのひとの霊的な肉体からは〈天使たち〉の香りがする。

その瞳はぼくたちに光の衣装を着せてくれる。

夜のなか孤独のなかであろうと、

道のうえ群衆のなかであろうと、

その幻影は宙に浮かび炎のように踊っている。

ときどき、それは口をひらいて語る。「私は美しい。私は命令します、私を愛するのなら、〈美〉それだけを愛しなさい。私は〈守護天使〉、〈ミューズ〉、〈マドンナ〉です。」

四三 生ける炬火

ぼくの前を歩いている、光にみちたこの〈眼〉、
とても賢い〈天使〉がたぶん磁力を与えたのだ。

〈眼〉は歩く、ぼくの兄弟であるこの神々しい兄弟は、
ぼくの眼のなかでダイヤモンドの火をゆすりながら。

すべての罣や重罪からぼくを護り、

〈美〉の道に足どりを導いてくれる。

かれらはぼくの従僕、ぼくはかれらの奴隷。

この生きた炬火たきまにぼくは全身全霊で従う。

魅了する〈眼〉よ、きみたちの輝きは神秘的な光、

白昼に燃える大蠟燭のもつ光。太陽のせい

赤くなっても、幻想的なその炎は消えることはない。

蠟燭は〈死〉を讃え、きみたちは〈目覚め〉を歌う。
きみたちはぼくの魂の目覚めを歌いながら歩く、
どんな太陽もその炎を弱められない星。

四四 功德

朗らかさにあふれた天使、ご存じですかあなたは、苦しみを、
恥を、悔恨を、啜り泣きを、愁いを、

それに、紙をくしゃくしゃにするように心をおしつぶす

あのぞっとする夜のとらえどころのない恐怖を、

朗らかさにあふれた天使、ご存じですかあなたは、苦しみを。

善良さでいっぱいの子供、ご存じですかあなたは、憎しみを、

〈復讐〉が地獄的な召集ラッパを吹き鳴らし

わたしたちの能力の大将になるとき、

暗闇のなかで握りしめた拳を、胆汁のように苦い涙を。

善良さでいっぱいの子供、ご存じですかあなたは、憎しみを。

健康でいっぱいの子供、ご存じですかあなたは、〈熱病〉を、

わびしい治療院の大きな壁にそって、

亡命者のように、足をひきずりながらゆき、
とぼしい太陽をもとめ、唇を動かしている。
健康でいっばいの天使、ご存じですかあなたは、〈熱病〉を。

美でいっばいの天使、ご存じですかあなたは、皺を、
老いのおそれを、またわたしたちの貪欲な眼が
ながいあいだむさぼり飲んだ眼のなかに、献身への
ひそかな嫌悪を読みとるときのおぞましい胸の痛みを。
美でいっばいの天使、ご存じですかあなたは、皺を。

幸福と、喜びと、光でいっばいの天使、
瀕死のダヴィデも健康をもとめ、きみの魔法のからだから
あふれでるものにすがろうとしたことでしょう。
でもぼくが願うのは、天使よ、きみの祈りのことばだけ、
幸福と、喜びと、光でいっばいの天使！

39 旧約聖書「列王記」(上、1)。老人になったダビデ王は、ふところに処女を抱いてからだを暖めた。

四五 告白

一度、ただ一度だけ、甘くうるわしいひとよ、
すべすべしたあなたの腕が私の腕に
よりかかった（たましいの暗い背景のうえで
この思い出はいまも色あせていない）。

夜も更けた頃。真新しいメダルのように

満月が出ていて、

夜はおごそかに、まるで河のように、

眠るパリの道をさらさらと流れていた。

家並みに沿って、大きな門のうえを、

猫たちがこそこそと通っていった、

耳をそばだて、あるいは親しい影のように、

ゆつくりと私たちに付いてきた。

ふいに、あわい光をあびて花開いた

気の置けぬ親しさのさなかに、

燦然たる陽気さのほかにはふるえ奏でることのない

ゆたかな、響きの良い楽器であるあなたから、

きらめく朝に鳴り渡るファンファーレのように

晴れやかな、朗らかなあなたから、

嘆きの調べ、変わった調べが

とびだした、ふらふらと

ひとりの虚弱な、おぞましい、暗い、けがれた女の子みたいに、

家族の者が赤面しそうな、

長いこと世間の眼をはばかって、

ひそかに穴ぐらへ閉じこめておいた女の子みたいに。

可哀想な天使、それは歌っていた、あなたの耳障りな調べは。

「この世に確かなものなんて何もない、
どんなに念入りにお化粧しても、いつだって

人間のエゴイズムがひよつこりと顔を出す。

美人でいるって、過酷な仕事、

それにおしきせの微笑みを浮かべ

うっとりしてみせる狂った薄情なダンサーの

どこと行って取柄のない仕事でもあるし。

ひとの心をあてにして築くだなんて、愚かなこと。

なにもかもがらがら崩れてしまふ、愛も美貌も、

〈忘却〉が背負い籠のなかへ投げ込んで

〈永遠〉へと送り返してしまふ！」

ぼくはしばしば思い浮かべた、この魔法の月を、

この沈黙を、このやるせなさを、

そして心の告解所で
ささやかれたこのおそろしい打明話を。

四六 霊の曙

放蕩者のもとへ、白く赤いよあけが
心を咬む〈理想〉と一緒に入ってくると、
仇討ちを果たす神秘のはたらきで、
眠りこけている獣のなかに天使が目を覚ます。

今もなお夢み、苦しんでいる、打ちのめされた男のために、
到達不可能な〈霊の空〉の青が
ひらいてぐんぐん深まってゆく、深淵のなかへひきこむように。
そんなふうには、愛しい〈女神〉よ、澄みきった汚れのない〈存在〉よ、

おろかしい饗宴のけぶりたつ残骸のうえで
きみの思い出はますますはつきり、薔薇色に、魅力的に、
たえず飛びかっている、みひらいたぼくの眼さきで。

蠟燭の炎は太陽のひかりに黒ずんでしまった。
そんなふうには、いつも負け知らずのきみの幻影も、
輝きわたる魂よ、不滅の太陽にそっくりだ！

四七 タベの諧調ま

いま時はおとずれて、茎のうえにふるえながら
花は一輪ごとに香炉さながらくゆりたつ。
音と香りはタベの大气のなかをめぐる。
愁いのワルツ、けだるい眩暈めまい！

花は一輪ごとに香炉さながらくゆりたつ。
ヴァイオリンは苦しむ心のように震えている。
愁いのワルツ、けだるい眩暈！
空は大きな聖体安置台のように悲しく美しい。
ヴァイオリンは苦しむ心のように震えている、
黒く広大な無をいとう、優しい心！

○ 聯れんの二行目と四行目が次の聯の一行目と三行目になる。パントウム形式の詩。

空は大きな聖体安置台のように悲しく美しい。
凝固する血のなかに太陽は溺れた。

黒く広大な無をいとう、優しい心、
光あふれる昔日の痕跡をあつめている！
凝固する血のなかに太陽は溺れた……
きみの思い出はぼくのなかで聖体顕示台のように輝いている！

四八 香水壘

どんな物質をも多孔質にしてしまおう
そんな強い香りがある。ガラスをさえ貫いてしまふほど。
オリエント渡来の小箱は、あけようとするととき
錠前がきしみ、いやがって叫ぶ、

あるいは人気ひとけのない家のなか、時のつんとする匂いに満ちた、
埃っぽい黒い戸棚、それらをあけると、
ときおりみつかることがある、昔を思い出す古い香水壘、
そこからいきいきとひとつの魂がほとぼしり、帰ってくる。

千の思いが眠っていた、陰鬱いんうつな蛹まごたちが、
重い闇のなかで優しくふるえながら。
今、それは羽化して、いつせいに飛び立つ、

青く彩られ、薔薇色の釉をほどこされ、金のラメを散らして。

心酔させる思い出が、どんよりした大気のなかを

飛び交っている。眼は閉じてゆく。〈眩暈〉が

敗北した魂をとらえ、両手で押してゆく

人間の瘴気で暗くかすむ淵のほうへ。

〈眩暈〉は何世紀も経た淵のほとりに魂を打ち倒す、

そこでは、屍衣をひきさく臭うラザロ、

醋えた、魅力的な、いまわしい、古びた恋愛の

亡霊のような死体が目覚めながら動いている。

そんなふうには、人々の記憶の中から失われ

陰気な戸棚の片隅に、

古び、すさみ、老いさらばえ、埃にまみれ、汚らしく、卑劣で、

べとべとし、罅われた香水壺のこの私が、捨てられてしまうとき、

私はおまえの棺になっているだろう、愛しい悪臭よ！
おまえの力と猛々しさの証人に。
天使によって調合された愛しい毒！ 私を咬む
リキュール、おお、わが心のいのちよ、死よ！

四九 毒

ひどくみすぼらしいあばら屋にワインは羽織らせることができる

奇跡のような豪華さを、

金いろをおびた赤い靄のなかに幻想的な柱を

一本ならず出現させることもできる、

よどんだ空に沈む日輪のように。

阿片は限界を持たないものを大きくし、

無限のものを伸ばし、

時をふかめ、官能をうがち、

黒く陰鬱な快樂で

魂をあふれさせる。

これらすべてもきみの眼、緑の眼から

ながれ出る毒にはかなわない、

ぼくの魂がふるえ、逆さまに映るおのれを見る湖……

夢想が群をなしてやって来る

この苦い淵で渴きを癒そうとして。

これらすべてもきみの嚙む唾の

おそろしい奇跡にはかなわない、

それはぼくの魂を悔いもなく忘却のなかに沈め、

眩暈めまいを運びながら、

ふらふらの魂を死の岸辺へと転がしてゆく！

五〇 曇り空

靄におおわれているようなきみの眼ざし。
不思議なその瞳（青、灰色、それとも緑？）
こもごもに柔和で、夢みるようで、つれなくて、
空のすげなさと色の淡さを映している。

きみを見ると思い出す、白く、生ぬるく、薄紗へんしゃにおおわれたあの日々、
魅入られてさめざめと心の泣きぬれる日々、
すると、未知の苦痛にさいなまれ、よじられ、
あまりにも目覚めた神経がまどろむ精神をあざ笑う。

きみは似ていることがある、霧ふかい季節の太陽が
火をとすあのうるわしい地平線に……

なんときみは燿^{かが}うのだろう、曇^かり空からおちる
陽の光に燃えながら濡れそぼつ風景よ！

おお、危険な女、おお、誘惑の風土、
ぼくはきみの雪やその氷雨も愛するだろうか、
きびしい冬からひきだせるだろうか
氷や鉄よりもっと鋭い快樂を。

五一 猫

ぼくの脳髓のなかを散歩している
まるでじぶんのアパルトマンにいるように、
強く、柔和で、魅力的な、美しい猫。
にやあと鳴いても、ほとんど聞こえない、

そんなにも音色は柔らかく秘めやかだ。
でも、甘えた声のときも、うなり声のときも、
つねにゆたかな、深い声。
そこに猫の魅力と秘密がある。

ぼくの資質のいちばん暗いところに
珠をむすび、沁みこんでくる、
この声、調べのよい詩句のようにぼくを満たし、
媚薬のように心地よくしてくれる。

どんなに残酷な痛みも眠らせてくれる
あらゆる恍惚をふくんでいる。
どんなに長い文を言うのにも、
ことばを必要としない。

ぼくの心、完璧な楽器と、
ぴったりかみ合い、
一番ふるえる弦をいとも堂々と歌わせる
弓は、いや、ありはしない、

きみの声のほかには、神秘的な猫よ、
熾天使^トのような猫、奇妙な猫よ、
きみのなかでは、天使のなかのように、
なにもかもが玄妙で調和している！

ト 「一祝祷」の注参照。大天使（ガブリエル、ミカエル、ラファエル）の下に位置する天使の位のなかで最高位の天使。
三対の翼を持つ。

II

ブロンドと褐色の毛皮から
とても甘い香りがして、ある夕べ
ぼくは焚きしめられた、
一度、ただ一度、撫でたせいで。

それは場所の霊。

じぶんの支配下にあるものすべてを
判じ、主宰し、息を吹きこむ。

たぶん、妖精なのだろう、神かもしれない。

ぼくの眼が、愛するこの猫のほうへ

磁石のように吸い寄せられ、

従順にふりむき、そして

自分のなかを見つめるとき、

見えるからびっくりする
その蒼ざめた瞳の炎、
あかるいランプ、生きているオパール、
じつとぼくを見つめている。

五二 美しい船

ぼくはきみに語ろう、なよやかな艶えんなるひと！
その若さを飾っている美しさのあれこれを。

描こう、きみの美を、

少女期と女盛りのとけあっているところを。

ふわりと広がるスカートで空気を掃いてゆくときに、
きみは沖へ船出する美しい船のよう、

帆をあげ、ゆれながら

優しい、けだるい、緩慢なリズムに身をまかせ。

広くて円い首の上、肉付きのよい肩の上、

きみの頭はふしぎな魅力をたたえあたりを払う風情。

落ちついてほこらしげに

おごそかな子どもよ、きみはじぶんの道をゆく。

ぼくはきみに語ろう、なよやかな艶なるひと！

その若さを飾っている美しさのあれこれを。

描こう、きみの美を、

少女期と女盛りのとけあっているところを。

きみの胸はせりだして、モワレの布を押しあげる、

かちほこるその胸は美しい戸棚

まるで突きでたあかるい飾り板が

盾のように閃光をとらえる。

挑発的な盾よ、薔薇色の尖端に鎧われて！

甘美な秘密をおさめた戸棚、おいしいものがいっぱい、

ワイン、香水、リキュール

頭も心もふらふらしてくる！

ふわりと広がるスカートで空気を掃いてゆくときに、
きみは沖へ船出する美しい船のよう、

帆をあげ、ゆれながら

優しい、けだるい、緩慢なリズムに身をまかせ。

気高いきみの脚は、フリルを蹴立てフリルの下で
ほの暗い欲望をいたぶり、きりきりさいなむ、

まるでふたりの魔女が深い器のなかで

黒い媚薬を回しているかのよう。

早熟なヘラクレスも遊ばれそうな、きみの腕、
ぬらりと光る大蛇を敵に回せるほどの逞しさ、

ぎゅうぎゅう締め上げるためのもの、

たとえばきみの心に愛人の姿を刻印するために。

は
幼少のヘラクレスは素手で二匹の蛇を絞め殺した。

広くて円い首の上、肉付きのよい肩の上、
きみの頭はふしぎな魅力をたたえあたりを払う風情。
落ちついてほこらしげに
おごそかな子どもよ、きみはじぶんの道をゆく。

五三 旅への誘い^ち

わが子、妹よ、
甘美だろうね

あそこに行ってふたりで暮らすのは！

心のままに愛し

愛して死ぬ

きみによく似た国で！

霞だつ空の

うるむ太陽

その魅力はぼくの精神^{こころ}には

とても神秘的

きみの裏切りの眼が

☪
例えばフェルメールの絵のようなオランダ風景画を見ながら恋人に語っている趣向。

涙をとおしてきらめくときの。

そこは、一切が秩序と美、
豪華、静寂、官能。

年月に磨かれた、
艶のある家具、

ぼくらの部屋を飾るだろう。

龍涎香のほのかな香りに
まざりあう珍しい

花々の匂い、

ゆたかな天井、

深い鏡、

東洋の栄耀、

なにもかもが秘めやかに

魂に語るだろう

ふるさとの優しい言葉を。

そこは、一切が秩序と美、
豪華、静寂、官能。

ほら、運河の上で
船が眠っている

漂泊の気だての船。

どんな小さなきみの望みも
かなえるために

世界の果てからやって来た。

——夕日が

野を装う、

運河を、街全体を、

ヒヤシンス石の黄色と金色で。

世界は眠る

熱い光のなかで。

そこは、一切が秩序と美、
豪華、静寂、官能。

五四 取り返しのつかないもの

われら、老いた長い〈悔恨〉を絞め殺すことはできるだろうか、

生きて、うごめき、身をよじり、

蛆が死体を、櫓の木を木喰い虫がそうするように

われらを糧に身を養っている。

非情の〈悔恨〉をわれらは絞め殺すことができるだろうか。

どんな媚薬、どんなワイン、どんな煎じ茶に、

この古い敵を沈めてしまえるだろう、

娼婦のように破壊的で食い意地のはった、

蟻のように忍耐強いこいつ。

どんな媚薬——どんなワイン——どんな煎じ茶に。

言ってくれ、美しい魔女よ、おお。知っているのなら、

苦悶ではりさけそうなこの精神に、

負傷兵に潰され、馬の蹄にかけられる

瀕死の男そっくりなこの精神に、

言ってくれ、美しい魔女よ、おお。知っているのなら、

早くも狼に嗅ぎつけられ、鴉の狙っている、

この断末魔の男に、

この打ち砕かれた兵士に！ 十字架と墓を

あきらめなくてはならないのかどうか。

狼が早くも嗅ぎつけている哀れな断末魔の男！

ぬかるむ黒い空を照らすことはできるのか。

タールよりも厚ぼったく、朝も夕もない、

星も、不吉な稲妻もない

暗闇を引き裂くことはできるのか。

ぬかるむ黒い空を照らすことはできるのか。

〈旅籠〉の窓ガラスに輝く〈希望〉は

吹き消された。永遠に死んでしまった！

月も光線もなく、悪い道をゆく殉教者を、

泊める場所はどこにある！

〈悪魔〉が〈旅籠〉の窓ガラスにある全てを消してしまった！

いとしい魔女よ、お前は地獄落ちの者を愛するか。

言ってくれ、お前は贖罪の不可能なものを知っているか。

毒矢を放つ〈悔恨〉を知っているか、

おれたちの心臓を標的にしているやつだ。

いとしい魔女よ、お前は地獄落ちの者を愛するか。

〈取り返しのつかないもの〉が呪われた歯で噛じる、

しよぼくれた記念碑、おれたちの魂を、

そして白蟻のように建物を土台から

しばしば攻撃する。

〈取り返しのつかないもの〉が呪われたその歯で嚙じる！

——ときおりおれは見た、安劇場の奥

燃えるようにオーケストラが鳴り響くなか

一人の妖精が地獄の空に

奇跡的な夜明けをともしのを。

ときおりおれは見た、安劇場の奥

光と黄金と紗ガヤセでできた、ひとりの存在が、

ばかでかい〈サタン〉を打ち倒すのを。

けれど恍惚エクスタクシが一度も訪れないおれの心は、

紗の翼をした〈存在〉を

いつも、いつも空しく待っている劇場なのだ！

五五 語らい

あなたは美しい秋の空、澄んだ薔薇色の！
でもわたしのなかに悲しみは海のように満ちてくる、
そしてひいてゆく、この陰鬱な唇のうえに
苦い泥土の灼けるような思い出を残して。

——きみ^{キミ}の手は空しく滑っている、うっとりしているぼくの胸のうえを。
その手に探られているのは、恋人よ、それは女の鈎爪と
凶暴な歯に荒らされた場所。
もうぼくの心を探るな。獣たちが食べてしまった。

おれの心は群衆にめちやくちやにされた宮殿。

—
^{キミ}同じ恋人を尊称の《vous》（あなた）や親称の《tu》（きみ）で呼び変えることによって心理的な距離感の揺れ動く様をあらわしている。

そこでは人が酔っぱらい、殺しあい、髪をつかみあう！

——あなたのあらわな胸のまわりにひとつの香りが泳いでいる！

おお、〈美〉よ、魂を打つ厳しい殻笄、きみはそれを望んでいる！

祭りのようにきらめくその炎の眼で、

獣たちが食い残したこのぼろきれを灰にしてくれ！

五六 秋の歌

1

やがてわれらは沈むだろう、冷たい闇のなかに。
さらば、短か過ぎたわれらの夏の生き生きとした輝き！
すでにわたしには聞こえる、どきりと不吉な音をたて
中庭の敷石に薪束の響くのが。

冬のいっさいがわたしのなかに戻ってくる。怒り、
憎しみ、戦慄、恐怖、無理強いされた辛い仕事、
そして、北極地獄に浮かぶ太陽のように、
わたしの心臓は赤く凍った塊にしか過ぎなくなるだろう。

ふるえながらわたしは聞く、ひとつまたひとつ薪が落ちるのを。
断頭台を築くときにもこれほど鈍く響きはしない。
わが精神はたゆみなく重い破城槌の打撃をうけ

崩れ落ちる塔に似ている。

この単調な衝撃に揺すられ、わたしには思われる、どこかで誰かが棺に大急ぎで釘を打っていると。だれのために？ —— 昨日は夏。今はもう秋！ この不思議な物音は出発のように鳴り響く。

2

あなたの切れ長の眼の緑ぐむ光が好きだ、
優しく美しいひと、けれども今日ぼくにはなににもかもが苦い、
なにひとつおよびはしない、あなたの愛も、小部屋も、暖炉も、
海のうえで輝きわたる太陽には。

それでもぼくを愛してほしい、柔和な心のひとよ！ 母でいてほしい、たとえ恩知らずのためにであろうと、意地悪な男のためにであろうと。

恋人で、妹でいてほしい。おごそかな秋の、あるいは沈む太陽の
つかのまの優しきでいてほしい。

あがいても無駄だ！ 墓が待っている。墓は貪欲だ！

ああ！ あなたの膝にぼくの額をのせ、

味わっていさせてほしい、白くうだるような夏を惜しみながら、
ゆく秋の甘く黄色い光を！

五七 ある聖母へ

スペイン風の絵馬

きみのためにぼくは築こう、〈聖母〉、わが恋人よ、
地下の祭壇を、ぼくの深い孤独の奥底に、
そして割りぬこう、心の奥の最も黒い片隅に、
世俗の欲望とあざけりの眼から遠くはなれて、
青と金の七宝でうめつくされた壁龕を。
きみはそこに立つだろう、驚いている 〈彫像〉よ。
水晶の脚韻が星座のようにたくみにあしらわれた
純粹な金属の格子、わが磨きあげた 〈詩句〉で、
きみの頭のために大きな 〈冠〉を作ろう。
また、ぼくの 〈嫉妬〉を生地にして、おお、死ぬさだめの 〈聖母〉よ、
きみの 〈マント〉を裁断しよう、
野蛮でごわごわして重い仕立ての、また裏地は疑念でできた 〈マント〉、
それは、見張小屋のように、きみの魅力を閉じこめるだろう。

それは〈真珠〉ではなく、ぼくの〈涙〉をすべて使って縁取られるだろう！
きみの羽織る〈衣装〉、それは、ふるえ波打つぼくの〈欲望〉、
登っては降り、頂ではゆらりと揺れ、谷間では休息する〈欲望〉、
白と薔薇色のきみのからだの隅々を
それは口づけで被うだろう。

わが〈尊敬の念〉を用いて、きみに美しい繻子の〈靴〉を作ろう
神々しいきみの足に辱められる靴、

やわらかな抱擁のなかにその靴は足を閉じこめ、
忠実な鋳型のようにかたちを留めておくだろう。

たとえ入念な技をすべて傾けても、

〈踏み台〉のために銀の〈月〉を彫ることはできないなら、
きみの踵の下にはぼくの脇腹を咬む

〈蛇〉を置こう、勝ちほこり、贖いゆたかな女王よ、
憎悪と唾でふくれあがったこの怪物を

きみが踏みにじり、あざ笑ってくれるように。

きみは見るだろう、〈処女たちの女王〉の花咲く祭壇前にある

〈蠟燭〉のように、わが〈思念〉がずらりと並び、

青く塗られた天井に星かげとなって映えながら、

いつも燃える眼できみを見つめているのを。

ぼくのなかのすべてがきみを愛し、讚美するから、

すべては〈安息香〉、〈薰香〉、〈乳香〉、〈没薬〉となるだろう、

雪におおわれた白い頂、きみのほうへたえず、

嵐ふきまくぼくの〈精神〉は〈靄〉になつて立ち昇るだろう。

最後に、きみが〈マリア〉としての役割を全うするために、

また、黒い官能よ！ 愛と野蛮とを混ぜあわせるために、

悔恨にみちた拷問係、ぼくは、七〈大罪〉で

七本の〈ナイフ〉を作ろう。

切っ先鋭いやつだ、そして、冷血な軽業師のように、

きみの愛情の一番深いところを標的に、

そのぜんぶをぼくは突き立ててやる、息もたえだえなきみの〈心臓〉に、

すすり泣くきみの〈心臓〉に、せせらぐきみの〈心臓〉に！

五八 午後の唄

いじわるな眉毛のせいで
きみはおかしな雰囲気だ
とても天使の風情じゃない、
あだっぽい目の魔女よ、

ぼくはきみが大好きだ、浮ついた、
凄まじいわが情熱！

司祭が偶像にささげる
献身的な情熱。

砂漠と森が
硬い編髪を焚きしめている、
きみの頭は
謎と秘密の姿をしている。

きみの肉のうえを香りが徘徊している
まるで香炉をめぐるみたいに。
きみは夕暮れのように魅惑する、
暗く熱いニンフ。

ああ！ きみのけだるさには
どんなに強い媚薬もかなわない、
きみは死者をよみがえらせる
愛撫を知っている！

その腰は背なかや乳房と
むつみあい、
そしてきみは物憂げなポーズで
クッションを魅惑する。

ときおり、自分でも不思議な怒りを
鎮めるために、

きみは真面目に、惜しみなく
咬んだり、撫でたりする。

きみは、褐色の女よ、ぼくを引き裂く、
蔑みの笑いを浮かべて。

それからぼくの心の上に
月のように優しい瞳を置く。

きみの繻子の靴の下、
魅力的な絹の足の下、

ぼくは、ぼくは置く、大いなる歓びと、
わが天才と、わが運命と、

わが魂とを。きみによって癒される魂
きみによって、光と色よ！

わが黒いシベリアのなかの
熱い爆発よ！

五九 シジナ^ま

雅びな供回りをつれたディアーヌ^まを想い描いてほしい。

森を駆け、狩場の茂みをわけ、

髪と胸を風になぶらせ、どよもす声に酔いしれ、

颯爽^{さつそう}と、名だたる騎士を向こうに回して！

テロワーニュ^まを見たことがあるだろうか、殺戮の大好きな女、

靴もはいていない民衆を攻撃に駆りたて、

頬と瞳を火照らせ、じぶんの役割を演じ、

剣を握り、王宮の階段をのぼってゆくところを。

――
^ま サバチエ夫人の友人エリザ・ネリに着想した詩。エリザは梅毒に効くりキュールを、ナポレオン三世の暗殺未遂犯（死
刑となった）へ祝杯を掲げながら飲むような女丈夫であったという。

^ま ディアナ。ローマ神話の女神。狩猟と純潔の女神アルテミスと同一。

^ま テロワーニュ・ド・メリクール（1762-1817）。フランス革命時の名高い女傑。

シジナはそういう人！でも優しい女闘士
殺すのは好きだが、慈悲深い魂の持ち主でもある。
火薬と太鼓の音に煽られたその勇猛心も、

憐れみをこう者を前にすれば武器を置くことも辞さない、
その心は、炎で荒れてはいるものの、いつも蓄えている、
それに値する者のためには、注ぐべき涙をたっぷりと。

六〇 わがフランキスカ称よ

新しき弦いんにのせ汝なれに歌はん、
さみしき心のうちに
あそぶ若き獣よ。

花づなに飾られてあれかし、
汝なれのため罪も儂なれくなりゆける
うるはしき女よ！

慈悲深き忘却しん河のごとく、
汝なれの口づけを吾は汲まん、
そは磁力をこそ帯びたれ。

⊕
原文はラテン語で書かれている。

悪徳の嵐

八街ヤチガイにふきまきしとき、
あらはれいでたる、女神、

苦き難破にあひたるときの
救いの星のごとく……

御身の祭壇に心を懸けん！

徳をたたへたる池、

永久トキトキの若さの泉、

わが黙もせる唇くちに声をめぐみたまへ！

卑しきものを、御身は焼きたまへり。

硬こきものを、なめしたまへり。

ひ弱なるものを、堅くしたまへり。

空腹なるときの料理屋、

夜闇のともしび、
つねに吾をみちびきたまへ。

今ぞ吾に汝の力をくわへよや、
甘き香のこもりたる
やさしき浴槽よ！

吾が腰を巻きて燿へ、
天つ水にひたしたる
けがれなき帯よ。

寶石のきらめける盃、
塩あぢのする麵麩、こまやかなる料理、
神々しき葡萄酒、フランキスカよ！

六一 クレオールの婦人に

太陽に愛撫される香りのよい国で、
ぼくは知った、深紅にいろどられた木々と
眼に気だるさの降りそそぐ棕櫚とでできた天蓋のした、
世に知られない魅力をもつ植民地生まれの婦人を。

肌の色は青白くて熱い。褐色の髪をした魅惑のひとは
うなじに気品のあるしなをつくっている。
すらりとして背が高く、歩く姿は狩りをする女のように、
その微笑みはおだやかで眼には落ちつきがある。

もしもあなたが、奥様、真に栄えある国、
セーヌ河や緑なすロワール河のほとりにおいてになれば、
古の城館を飾るのにふさわしい美女よ、

あなたは蔭ふかい隠れ家で詩人たちの心に
千ものソネットを芽ぶかせることでしよう、
その大きな瞳のために、詩人はあなたの黒人以上にあなたにかしづくことでしよう。

六二 悲しみてさまよえる (Moesta et errabunda)

ねえ、アガート、きみの心はときおり飛んでゆくのか？
けがらわしい都会の黒い海から遠くはなれて、
燦然と光りはじけるもうひとつの海へ、
処女性のように青く、明るく、深い海のほうへ。
ねえ、アガート、きみの心はときおり飛んでゆくのか？

海、ひろやかな海は、ぼくらの労働を慰める！
ごうごうと鳴る風の果てしないオルガンに
伴奏されるしやがれ声の歌手、海に、
どんな魔物が子守歌の崇高なはたらきを授けたのだろう。
海、ひろやかな海は、ぼくらの労働を慰める！

ぼくを運び去ってくれ、客車！ 連れ去ってくれ、快速帆船！

遠く！ 遠く！ ここでは泥濘がぼくらの涙でできている！
——本当だろうか、ときおりアガートの悲しい心は
言うって。悔いからも、犯罪からも、苦悩からも遠いところへ、
運び去って、客車！ 連れ去って、快速帆船！

なんてきみは遠いのだろう、香ぐわしい天国よ、
そこは、澄んだ青空のもとなにもかもが愛と喜び、
そこは、ひとの愛するものがどれも愛されるにふさわしい、
そこは、至純の官能のなかに心がおぼれる！
なんてきみは遠いのだろう、香ぐわしい天国よ！

けれども幼い愛の緑の天国、
遠足、歌、くちづけ、花束、
丘のむこうでふるえるヴァイオリン、
夕べには、木立のなかで酌みかわすワイン、
——けれども幼い愛の緑の天国、

そつと盗む快樂にみちた、無垢の天国、
それはもうインドや中国よりも遠いのだろうか。
嘆きの叫びをあげて呼び戻すことはできるだろうか、
鈴のような声で今も蘇よみがえらせることは。
そつと盗む快樂にみちた、無垢の天国。

六三 幽霊

鹿毛色の眼をした天使のように、

おまえの寢室に戻り

音もなく滑り込もう、

夜の影と一緒に、おまえの方へ。

おまえに与えよう、褐色の女よ、

月のように冷やかな口づけと

墓穴のまわりを這いまわる

蛇の愛撫。

鉛色の朝がくると、

おまえは気づくだろう、おれの場所が空っぽなこと。

そこは日暮れまで冷たいままだろう。

ほかの者が優しさでするように、
おまえの人生と若さのうえに、
おれは恐怖で君臨したい。

六四 秋のソネット

水晶のように澄みきったきみの目はぼくに言う。

「変わった人、あなたって、いったい私のどこがいいの」

——可愛くしたまま、黙っていてくれ！ 古代の獣の純真さのほかは
何にでも苛立つ、ぼくの心、

きみにはその地獄の秘密をみせたくない、

ぼくをあやして長いまどろみへ誘ってくれる手をした人よ、
炎で書かれた暗黒の伝説も見せたくはない。

ぼくは情熱が嫌いだ、精神にはへきえきする！

優しく愛しあおう。〈愛の神〉がその見張小屋で、

陰険に待ち伏せして、運命の弓をひきしぼっている。

ぼくはその古い武器庫の飛び道具なら知っている。

犯罪、恐怖、狂気！——おお蒼ざめた雛菊マルグリットよ！
ぼくのようにきみも秋の太陽ではないのか、
おお、ぼくのこんなにも白い、こんなにも冷たいマルグリット。

六五 月の悲しみ

今夜、月は夢みている、ふだんよりもしどけなく、
たくさんのクッションにもたれ
眠りにおちるまえにぼんやりした軽い手つきで
乳房のまわりを撫でている美女のように、

なよなよと雪崩うつ繻子の背もたれのうえで、
いまにも死にそうに、ながい悶絶に耽っている、
そして、花ひらくように空へのぼってくる
白い幻影のうえに、眼をさまよわせている。

ときおりこの地球のうえに、愁いのつれづれに、
こっそりと一粒の涙を月がながすとき、
敬虔な詩人、この眠りの敵は、

手のくぼみに、オパールのかけらのように
虹色の反映をもつこの蒼白い涙を受け、
心のなかにしまっておく、太陽の眼から遠いところに。

六六 猫

熱烈な恋人も峻厳な学者も

実りの季節には、ひとしく愛している、

家の自慢の、つよくて優しい猫、

猫もまた彼らのように寒がりで、出不精だ。

猫は学問と官能の友、

暗闇の静けさと恐怖をもとめる。

エレボス^もも猫を死の馬車馬として使ったかもしれない、

誇りたかい彼らが雇われの境遇に甘んじられるなら。

猫は想いにふけりながら、孤独の底に横たわり

果てしない夢のなかへ眠りこんでいくような

49
ギリシヤ神話。〈カオス〉と〈夜〉の息子。地獄での贖罪や、あるいは地獄そのものを指す。

大スフィンクスの高貴な姿になっている。

豊穡なその腰は魔法のきらめきにみちている、
その神秘の瞳には、さらさらした砂のような金のかけらが
そこはかとなく星のようにちりばめられている。

六七 みみずく

黒い水松みづまつの葉陰かげに身を隠し、
みみずくが並んでいる、
異国の神々のように、
赤い瞳まなこをぎよろりとさせ。瞑想めいそうしているのだ。

身じろぎもせず、愁しみいの時刻まで
そうしているだろう、
暗闇くらやみが、斜かための太陽たいやうをおさえこみ
あたりにたちこめる時刻まで。

かれらは態度で賢者けんじやに教える
この世では喧噪けんざうや動きを
いましめなくてはならないと。

過ぎゆく影に酔う者は
いつも罰を受ける
場所を変えようと望んだゆえの。

六八 パイプ

わたしは作家のパイプ。

アビシニア²⁰の女やカフラリア²¹の女の
顔色をしているわたしをよく見れば、
もうおわかりね、主人は大の愛煙家。

主人が苦しみでいっぱいするとき、

わたしは煙をはきます、

労働者の帰りにあわせて夕食の支度をしている
藁小屋みたいに。

火のついた口からのぼる

ゆらめく青い網のなかに、

²⁰ 今のエチオピア。
²¹ 南アフリカ南部地方。

うちのひとの魂を編みあわせ、あやしてあげます。

そして力強い慰撫をうねらせ
心を魅惑し、疲労から
精神を回復させてあげるの。

六九 音楽

音楽はしばしば私を海のようにとらえる！

蒼ざめたわが星にむかい、

霧におおわれた空のした、あるいは広やかなエーテルのなか、
私は帆をあげる。

胸をはり帆布のように

肺をふくらませ、

夜のヴェールにおおわれた

重なる波の背をこえてゆく。

苦しむ船の情念のすべてが

わがうちにふるえるのを感じる。

追い風や、嵐とその痙攣が

はかり知れない深淵の上で
私を揺する。べつ
のとき、平らな風、わが絶望の
大きな鏡。

七〇 埋葬

もしも、暗く蒸し暑いある夜、
善良なキリスト教徒が、憐れみの心から、
古い瓦礫の背後に
きみの自慢の体を埋めたら、

清純な星々が
おもし瞼を閉じる頃、
蜘蛛がそこに巣をかけ、
蝮が子を産むだろう。

一年中きみには聞こえるだろう
罰をうけた頭の上で、
狼や空腹な魔女たちの

せつない叫びや、
好色な老人の喧嘩や、
腹黒いスリの陰謀が。

七一 幻想的な版画

この奇妙な亡霊の装いは、

骸骨の額にグロテスクにのせられた

謝肉祭の匂いのするおぞましい王冠だけ。

拍車もなく鞭もなく馬を乗り回している。

この馬もおなじく幽霊で、黙示録の駄馬なのだが、
てんかん病みのように鼻面に泡をふいている。

かれらふたりは空間をふかぶかとよこぎってゆき、

あぶなつかしい蹄で無限をふみつけてゆく。

馬に踏みつぶされる名もない群衆のうえに

騎士はざらりと光るサーベルを振り回し、

まるでじぶんの屋敷を見回る領主のように、

地の涯はても見えない広大な冷たい墓を駆けまわっている。

そこには白く濁った日の光をあびながら、

古今の歴史の諸民族が眠っている。

七二 陽気な死人

蝸牛でいっぱいのねばつく地面に
ぼくはじぶんで深い穴を掘りたい。
そこなら、古なじみの骨をのんびり横たえ
波まに浮かぶ鮫のように、忘却のうちに眠ることもできるだろう。

ぼくは嫌いだ、遺言も墓も。

世間にむかって涙をねだるよりは、

生きたまま、鴉を呼び

穢れた屍をすみずみまで突つき破ってもらおうほうがいい。

おお、蛆虫よ！ 耳も目もない黒い相棒、

自由で陽気な死人がおまえたちのほうへやってくるのを見てくれ、
道楽者の哲人、腐敗の息子たちよ、

さあ、この廢墟をなんの悔いもなく通つてゆけ、
そして教えてくれ、魂のない、死者のなかの死者
この老いぼれの肉体にまだいたぶることのできるところが残っているかどうか！

七三 憎しみの樽

〈憎しみ〉は青白いダナイデス³³の樽。
逞しい赤い腕をした、死にも狂いの〈復讐〉が
その空っぽの闇のなかへ死者の血と涙でいっぱい
大きなバケツをいくらぎあざあ傾けても、

〈悪魔〉がその深淵にひそかに穴をあけ、
そこから千年の汗と努力は逃げてしまふ、
それでも〈復讐〉はじぶんの犠牲者にもう一度命をふきこみ、
肉体を蘇らせ搾り取ることはできるだろう。

³³ アルゴス王ダナオスの五十人の娘。父の命令で、ひとりを除いて、五十人の夫といとこを殺した。彼女たちは、死後、底の抜けた樽に永遠に水を入れ続けるという罰を受けた。

〈憎しみ〉は居酒屋の奥の酔っぱらい、

リキュールから渴きが生まれ、

レルヌの大蛇スネのようにそれが増えていくのを感じている。

——でも幸せな呑兵衛はじぶんを負かす者を知っている。

〈憎しみ〉が甘んじているのは、テーブルの下でけっして眠ることができないという、情けない運命だ。

⁵³ペロポネソス半島レルヌ近郊の沼に住んでいた怪物で、その多頭の首は切ってもすぐに生えてきた。ヘラクレスによって退治された。

七四 罅われた鐘

苦くもあれば甘くもある、

冬の夜、はぜてはけぶる火のそばで、

霧のなか歌っている組鐘カネの響きにのって

はるかな思い出がゆつくりとおきあがるのを聞いているのは。

はつらつたる咽喉をした鐘は幸いだ、

老齡カウシキにもかかわず、身も軽く、鬢カウシキ鑠シヤクとして、

宗教的な大声を実直にはりあげている、

テントのもとで番をする老兵のように！

わたし、このわたしは、魂が罅ヒビわれている。気もふさぎ

夜の冷たい空気をじぶんの歌で満たそうとしても、

その弱った声は、負傷兵のあつぼったい

喘ぎのように思えることがよくある、
血の湖のほとりに忘れられ、積みあげられた死者の山におしひしがれ、
懸命にがんばっているのに、身動きできず死んでゆく兵士の喘ぎに。

七五 憂愁

〈雨月〉⁵⁴が、街全体にむかつていららし、
壺からざあざあと傾けている、
近くの墓地の蒼白い住人へは暗い冷気を、
霧たちこめる場末町には死の運命を。

床石のうえでぼくの猫は寝藁をさがしながら
疥癬病みの瘦せたからだを休みなく動かしている。
老いた詩人の魂が雨樋のなかをさまよっている、
寒がりな幽霊のもの悲しい声をして。

鐘は嘆き、くすぶる薪は
風邪をひいた柱時計に裏声で伴奏する、

フランス革命時に作られ、一七九二年から一八〇六年まで使用された、共和歴の月名のひとつ。一月二十日から二月十日までに相当する。

そのあいだ、水腫病すいしゅびょうみのお婆おばさんの宿命しゅくめいの遺品、

いやな臭いのしみついた一組のトランプのなかで、
美しいハートのジャックとスペードの女王が
死んだ愛のことを陰鬱いんうつにしゃべっている。

七六 憂愁

私は千年生きたよりももつと多くの思い出を持っている。

勘定書き、詩、恋文、訴訟書類、小唄、
領収書でぐるりと巻いた重い髪の毛、

それらのぎつしり詰まっている大きな箆笥ひきたしの抽斗ひきたしに
隠されている秘密も私の悲しい脳髄にはかなわない。

それはピラミッド、巨大な地下納骨堂、

共同墓地よりもたくさんの死者を抱えこんでいる。

——私は月にきらわれた墓地、

まるで悔恨のように、長い蛆虫が身をひきずり、

最愛の死者たちにいつも襲いかかっている。

私は色褪せた薔薇でいっぱいの古い閨房、

そこには時代遅れの流行が雑然と散らばっている。

愚痴っぽいパステル画と青白いブーシェの絵が、

ぽつんと、栓の抜けた香水壺の匂いを嗅いでいる。

足をひきずりながら途方もなく長ながと日々は過ぎてゆき、
雪ふりしきる年月の重い綿雪の下

鬱ふさぎこみすべてに興味をなくしたはてに実る果実、倦怠は
不滅の大きさになっている。

——これからはおまえは、おお、命ある物質よ！

漠然とした恐れにとりまかれ、霧のたちこめる

サハラ砂漠の奥深くうずくまる花崗岩にすぎない。

無関心な世の中には知られていない老スフィンクス、

地凶のうえにも忘れられ、その気立ての荒さときたら

沈んでゆく太陽のひかりにむかつてしか歌わない。

七七 憂愁

わたしは雨ふる国の王のようだ、
裕福だが不能、若いのにひどく老けている。
うやうやしくお辞儀する教育係を軽蔑し、
犬にもほかの動物にもうんざりしている王。
彼には何ひとつ面白くない、狩りの獲物も、鷹も、
バルコニーの前で死んでゆく民衆も。
気に入りの道化師のグロテスクなバラードも
この冷酷な病人の額を晴らすことはもうない。
百合の花をあしらったベッドは墓に変わり、
どんな君主のことも美しいと思う側女たちも、
この若い骸骨から微笑みをひきだせる
淫らな装いを見つけることはもうできない。
彼のために黄金を作りなす賢者も
その存在から腐った要素を抽出することはできなかつた。

老いらくの日々に権力者が思い出す、あの風呂、
ローマ人からわれらに伝わるあの血の風呂にいれても、
呆けたこの屍を温めることはできなかつた。そのからだには
忘却河の緑の水が血のかわりにめぐっている。

七八 憂愁

低くたれこめた重い空が蓋のように
ながい倦怠にとらわれうめく精神のうえにのしかかり、
地平線をぐるりと抱き込み
夜にもまして悲しい黒い光をわれらのうえに注ぐとき、

大地がじめじめした独房にかわり、

〈期待〉が蝙蝠のように

おずおずした翼で壁を叩いたり

腐った梁に頭をぶついたりしながら飛びまわるとき、

はかりしれない雨脚をひろげながら雨が

広大な牢獄の鉄格子を真似るとき、

そしてさもしい蜘蛛の押し黙った群が

われらの脳髓の奥にきて巣をかけるとき、

ふいに荒々しくいくつもの鐘が跳ねあがり
空にむかつて恐ろしいわめき声を投げつける、
まるで故郷をもたない、さまよえる亡霊が
かたくなに呻き声をあげはじめるように。

——そうして長い葬列は、太鼓もなく音楽もなく、
わたしの魂のなかをゆっくりと進んでゆく。〈希望〉は、
敗れ、泣いている。残忍で横暴な〈苦悶〉は
うなだれたわたしの頭蓋にいつぽんの黒旗を突き立てる。

七九 強迫観念

大きな森よ、おまえはぼくを聖堂のように怖がらせる。

おまえはパイプオルガンのように唸る。そして永遠の喪に服した部屋で、
老いた呻き声がふるえているような、呪われたぼくらの心のなかで、
おまえの「De profundis（深き淵より）」のこだまが反響している。

ぼくはおまえを憎む、へわたつみよ！ おまえのとび跳ねと騷擾を

ぼくの精神はじぶんのなかに見いだす。敗北し、

啜り泣きと侮辱でいっぱいになった男の、苦い笑い、

ぼくはそれを海のけたはずれな笑いのなかに聞く。

きみのことは気に入るだろう、夜よ！ その星々がなかつたら。

星々の光はすでに知られたことばを話している！
というのもぼくは虚無を、黒を、裸形をもとめているから！

けれども暗闇自体もうキャンバスだ、
そこには、なつかしい目をした今は亡き人々が
ぼくの目から千々にほとばしり出て、生きている。

八〇 虚無の味

陰鬱な精神よ、かつておまえは闘うのが好きだった。
拍車をあておまえの熱気をあおっていた〈希望〉は、
もうおまえに跨ろうともしない！ 臆面もなく横になれ、
いちいち障害物に蹴つまずく老いぼれの馬よ。

おとなしく諦めろ、わが心。獣の眠りをねむれ。

敗北した、蹄葉炎ていようえんにかかった精神！ 老いぼれの盗人よ、おまえにとって、
愛はもはや味気ない、いさかいもそうだ。

だから、さらば、銅あがねの歌とフルートの溜息！
快樂よ、すねた暗い心をもう試さないでくれ！

うるわしい〈春〉は匂いをなくした！

〈時〉はぼくを刻々とのみこんでゆく、

ふりしきる雪が硬直したからだをのみこむように。

高みからぼくはまるい地球をみつめている、けれども、

隠れ家となる苦屋くごをそこに探そうという気にはもうならない。

雪崩なだよ、ぼくを一緒に運び去ってはくれないか。

八一 苦悩の錬金術

じぶんの熱情できみを照らすものがいる、
きみのなかでじぶんへの喪に服すものもいる、〈自然〉よ！
いつぼうにむかつては「埋葬！」というものが
ほかのものにむかつては「人生と輝き！」という。

未知のヘルメス、ぼくに連れ添い

いつもぼくを臆病にした、

おまえのせいでぼくはミダス王^{ミダス}にそっくりだ、
錬金術師のなかでもいちばん悲しい王様。

おまえのせいでぼくは黄金を鉄にかえる、
天国を地獄に。

—
フリギアの王。触れるものをすべて金に変えることのできる能力をディオニソスから授けられた。

雲の経帷子のなかに

ぼくは愛しい屍をみつける、
そうして天の岸辺に
大きな石棺を築く。

八二 感応する恐怖

きみの運命のように狂おしくされた、
この奇妙な鉛色の空から、
きみの空虚なたましいのなかに
どんな考えが降りてくるのか。答えよ、放蕩者。

——暗く定めないものを
飽くまで欲しているぼくだ、
ラテンの樂園から追放された
オウイデイウスのようにめそめそしたりはしないだろう。

砂州のように引き裂かれた空よ、
おまえのなかにぼくの据傲きよごうが映っている。
喪に服すそのひろやかな雲は

ぼくの夢をのせた霊柩車だ、
おまえのかがよいはぼくの心が
よろこぶ（地獄）の反映だ。

八三 我と我が身を罰する者 (L' Héautontimorouménos)

お前を叩こう、怒りもなく、
憎しみもなく、肉屋のように、
モーゼが岩を叩くように⁵⁶！
そしてお前の瞼からほとばしらせよう、

苦しみの水を、
おれのサハラ砂漠をうるおすために。
期待にふくれたおれの欲望は
塩からいお前の涙のうえを泳ぐだろう

沖へ船出する船のように。
お前のいとしい啜り泣きは

⁵⁶ 旧約聖書「出エジプト記」(二七)。主は、モーゼに仰せられた、『略]おまえは、岩を打て。そうすると、水が流れ出て、民はその水を飲める。』(バルバロ訳)

それに酔うおれの心のなかで突撃の合図をかなでる
太鼓のように響くだろう！

おれは神聖なハーモニーのなかの
調子はずれな音ではないだろうか、
おれをゆすぶり、おれを噛む
貪欲な（皮肉）のおかげで。

やかまし屋のそいつが、おれの声のなかにいる！

おれの血のすべてだ、この黒い毒は！

おれは不吉な鏡

メガイラ^{メガ}がじぶんを見つめている。

おれは傷にしてナイフ！

平手打ちにして頬！

57
復讐神エリニユスの一人。憎しみの女神。

手足にして車裂きの車、
犠牲者にして拷問係！

おれは自分の心の吸血鬼、
——あの偉大な見捨てられた者[♁]のひとり
永遠に笑う罰を受け、
もはや微笑むこともできぬ！

♁
——
サタンを指す。

八四 取り返しのつかないもの

1

一つの〈エイデー〉、一つの〈フオルム〉、一つの〈存在〉。
青空を出発し、落ちてしまった
べとつく鉛色のステュクス河に
そこにはどんな〈天〉の眼も入りこめない。

ひとりの〈天使〉、無用心な旅人、
いびつな形の愛にひかれ、
なみはずれて大きな悪夢の底で
泳ぐ人のように身をあがき、

闘っている、不吉な懊惱おうのうだ！

巨魁きよかいなうねりを相手に。それは

狂ったように歌いながら

闇のなかを逆巻きながらうねってゆく。

魔に魅入られたひとりの不幸者
あてどない手探りをしながら、
爬虫類のうようよする場所から逃れようと、
光と鍵を探している。

地獄落ちの男、ともし火も持たず降りてゆく、
じめじめして深いことが
臭いによってわかる深淵のへり、
手すりのない永遠の階段を。

そこにはねばねばした怪物が見張っている、
燐光をはなつ大きな目のせいで
夜はいつそう黒々となり
見えるのはかれらの姿ばかり。

極地に囚われた一艘の船、
まるで水晶の罫にとらわれたかのよう、
どんな宿命の海峡をぬけ
この牢獄におちてきたのか探っている。

——取り返しをつかない運命の
精確な象徴、完璧な絵、
つらつら思えば、〈悪魔〉はいつも
することはどれも首尾よくやり遂げる。

2

暗く澄みきってむかいあう
じぶんの鏡になった心！
〈真実〉の井戸、澄みきって黒く、
鈍色の星が一つふるえている、

皮肉な、地獄の灯台、
悪魔の恩寵の篝火、
唯一の慰撫にして栄光、
——〈悪〉のなかの意識！

八五 時計

柱時計！ 陰鬱な、おそろしい、非情な神、
その指はわれらを脅し、そして言う。「思い出せ！
いくつもの〈苦惱〉が、ふるえながら、
まるで的にあたるように、恐怖でいっばいのおまえの心臓に突刺さるだろ
う。

もやもやした〈快樂〉は舞台の袖へのがれ去る空気の精のように
地平線のほうへ逃げてゆくだろう。

ひとそれぞれに、その季ときをとおして与えられている
愉悅のひとかけら、ひとかけらが、おまえから刻々と奪われてゆく。

一時間に三千六百回、〈秒〉がささやく。

「思い出せ！」——昆虫のような声の、
すばやい〈今〉が言う。「わたしは〈かつて〉だ、

おまえの人生をわたしのけがらわしい管で吸い上げたぞ！」

Remember！ 思い出せ、放蕩者！-Esto memor！

（わが金属製の喉咽はありとあらゆる言語をしゃべる）
素っ頓狂な人間よ、分はそこから黄金を抽出せせずに
手放してはならない鉱石なのだ！

思い出せ、〈時〉は貪欲な賭博者で

毎回、いかさまもなく、勝ちをおさめる！ それが決まり。

日の光はおとろえる。闇はましてくる。思い出せ！

深淵はいつも渴いている。水時計は空になる。

まもなく時は鳴るだろう、神々しい〈偶然〉が、

また、おまえの女房でいまもまだ処女のままの厳格な〈美德〉が、

〈改悛〉（おお！この最後の宿屋！）までもが、なにかもが、そのと
き

おまえに言うだろう。死ね、くたばりどこない！ もう手遅れだ！」

パ
リ
情
景

八六 風景

身も心も清らかに田園詩をつくるために、
ぼくは占星術師のように空のかたえに横たわりたい、
そうして、鐘に隣あい、夢みながら聞いていたい
ふく風にはこぼれてくるそのおごそかな賛美歌を。
両手を顎に添え、屋根裏部屋の高みから、
ぼくは見るだろう、歌ったり喋ったりしている工房を。
煙突や鐘を―それは街にたつ帆柱―
また永遠を夢みさせる大空を。

霧をとおして見ていると甘く優しい気持ちになる、青い空には
星が生まれ、窓辺にはランプのあかりが生まれ、
石炭のけむりの大河はいくつも空へのぼってゆく、

そして月は青白い魅惑を注ぎかける。

ぼくはいくつもの春を、夏を、秋を見るだろう。

それからしんしんと雪のふる冬が来る。

ぼくはいたるところのカーテンや錠戸を閉め

おとぎ話の宮殿を夜のなかに築くだろう。

それからぼくは夢みるだろう、青みがかつた地平線を、

庭を、雪花石膏アラバスターのなかで泣いている噴水を、

口づけを、朝な夕なに歌う鳥たちを、

また〈恋愛牧歌〉の持っているあどけないものすべてを。

〈騒乱〉が窓をむなしく暴風のように襲おうとも、

ぼくの額を机から上げさせることはできないだろう。

なぜなら、ぼくは官能に耽っているだろうから、

心のままに〈春〉をよびおこし、

心臓から太陽をひきだし、熱く燃える思念から

なま暖かな空気をうみだす官能のなかに。

八七 太陽

古い場末町は淫靡いんぴな色事の隠れ家、
鎧戸がぼろ屋に垂れている、そこに沿って、
酷薄な太陽が、街に野に、屋根の上、小麦の上に、
光の矢をさかんに射かけるころ、
ぼくは一人空想の剣術の稽古にでかける、
ありとあらゆる片隅に偶然の脚韻を嗅ぎつけ、
敷石につまづくように語のうえでつまずき、
ときには長いこと夢みていた詩句にぶつかったりしながら。

この養いの父⁵⁹は、萎黄病の敵なのだ、

59 太陽を指す。

野に薔薇や蚯蚓みみずを目覚めさせてくれる。

気がかりを空へと蒸発させ、

脳髓と蜂の巣に蜜をいっぱい満たしてくれる。

かれこそは、松葉杖にすがる者を若返らせ、

娘のように快活な優しい気立てにしてくれる。

花咲きたいといつも願っている不死の心のなかで

作物に増えよ熟れよと命じてくれる。

まるで詩人のように街なかに降り立てば、

かれはどんなに卑しいひとの運命も高貴なものにかえ、

王としてはいつてゆく、音もなく従者もなく、

あらゆる病院のなかへあらゆる宮殿のなかへ。

八八 赤毛の乞食女に

色白の赤毛の娘、
服の穴から
のぞく

貧乏と美しさ、

虚弱な詩人、ぼくには、
病弱な若いきみの、
しみだらけのからだだが
愛しい。

物語の女王が履く
ビロードのブーツ
よりも優雅に

きみの履く重い木靴。

丈の短かすぎるぼろ着のかわりに、
うるわしい宮廷衣装が
きみの踵のうえに衣ずれの音をたて
長い裳裾を曳いていたら、

穴のあいている靴下のところに、
すれっからしの眼のために
金のナイフが脚のうえで
いまでも光っていれば、

ゆるい結び目が
ぼくらの罪のために
眼のように輝いているきみのふたつの美しい
乳房をはだけてくれたら、

服を脱がせるのにも

きみの腕がじらしてみせ、

ふざけかかる指を

いたずらっぽく追い払えば、

このうえなく粒ぞろいの真珠、

ベロー^⑧先生のソネットを

恋の鎖につながれた伊達者たちは

たえず献上し、

へぼ詩人たちは

初穂をきみに献げては

階段の下から

きみの靴を見つめ、

⑧ 十六世紀フランス・ルネサンス時代を代表するプレイヤード派（ルネサンス期、ロンサールやデュ・ベレーを中心に、中世の詩と決別した新しい詩の成立を目ざした）の詩人。ボードレールはこの詩では語彙や綴りの擬古的な使用を施している。

たまたま惚れ込んだあまたの小姓、
あまたの殿様、あまたのロンサールは
愉悦をあてに、狙うだろう
きみの涼しい隠れ家！

きみはベッドで数えるだろう
百合の花よりも多くの口づけ
そして言いなりにするだろう
ヴァロワ^②の公達^{きんたち}をひとりならず！

——とはいうものの四つ辻の
ヴェフル^③かなにかの入口に
出された古い残飯やなんかを
きみは漁り^{あひ}ながらゆく。

② 十四世紀から十六世紀にかけてのフランスの王朝。アンリ四世即位（一五八九年）でブルボン朝に代わった。
③ パリ、パレ・ロワイヤル地区の高級レストラン。

二十九スーのアクセサリー

そっと睨んでゆくきみに

ごめんよ！ そいつを贈ることも

できないぼくだ。

だから行け、身につけるものといつても

香水や真珠やダイヤじゃなく、

きみの瘦せた裸だけを飾りに、

おお、ぼくの美女よ！

八九 白鳥⁶³

ヴィクトル・ユゴー⁶⁴

1

アンドロマック、あなたを思う！ あの小さな河、
寡婦であるあなたの苦悩のはかりしれない威厳が
かつて輝いた哀れなわびしい鏡、

⁶³この詩が前提している文化的な記憶は以下の通りである。ウエルギリウスの『エネアデス』（第三巻）に描かれるアンドロマケー（フランス語読み、アンドロマック）。彼女は、トロイア王ヘクトール（トロワ王エクトール）の妻だったが、トロイア戦争で夫をアキレウスに殺されたあと、アキレウスの息子ネオプトレオス（仏、ピリュス）の奴隷となり、その死後、ヘレノス（仏、エレニユス）の妻となり、エーペイロスの女王となる。彼女はその地の川を故郷トロイアのシモイス河にみたて故郷を偲ぶ。

前提されている歴史的な事実は次の通りである。詩のなかで（私）の横切るカルーゼル広場は、一八四九年に造成工事が着工された（完成は一八〇八年）。ここにはかつて、ドワイエネ通りをはじめとするむさ苦しい一角があり、ゴーチエやネルヴァルら、ロマン主義の作家たちが住んでいた。それがオスマンのパリ改造によって姿を消す。

また、一八四六年三月十六日の『海賊・サタン』紙に、四羽の白鳥がチュイルリーの噴水に来て、人が水を出してくれるまでそこで遊んでいたという、詩に書かれているのとよく似た出来事の記事が掲載されている。

⁶⁴ 当時ユゴーはナポレオン三世統治下のフランスを去ってガーンジー(Guernsey)島で亡命生活を送っていた。

あなたの涙で水量をましたあの偽にせのシモイス河が、

突然私の豊穡な記憶をはらませた、

新しいカルーゼル広場のを渡っていたとき。

むかしのパリは最早ない（街の形は

人の心よりも、ああ！ 早く変わってしまった）

精神こころのなかに見えるばかりだ、あのバラック小屋の群れ、

荒削りの柱頭や柱芯の山、

雑草、溜まり水で緑になった大きな石の塊、

また、ガラス窓に照りはえて、雑然としたがらくた。

そこにはかつて動物小屋が掛かっていた。

そこで私はある朝見た、冷たく晴れた空のもと

——
ルーヴル宮の広場。ゴーチエ、ネルヴァルといったロマン派詩人やその友人たちが住んでいたドワイエネ通りなどを含む居住区だったが、セーヌ県知事オスマンによる一八五〇年代以降のパリ大改造によって取り壊され、「新しいカルーゼル広場」ができた。現在、ルーブル美術館の中庭のガラスのピラミッドがある一帯。

〈仕事〉が目覚める時刻、ごみ集めの車が
静かな空気のなかにながらりと暗い音をたてる頃、

檻から逃げてきた一羽の白鳥が、
水掻きのついた足で乾いた敷石をこすりながら、
でこぼこした地面に白い羽毛をひきずっていた。
水のない小川のほとりで鳥は嘴をひらき

土埃のなかに神経質に翼をひたしていた、
そして言った、心を生まれ故郷の美しい湖でいっばいにしながら。

「水よ、お前はいつ降るのか。お前はいつ轟くのか、雷よ」
私は見る、奇妙な宿命的な神話、この不幸者が

オウイデイウスの語る人間^⑤のように、ときおり空へ向けて、
皮肉な、酷いまでに青い空へ向けて、

⑤ オウイデイウスの『変身物語』(1-18)。顔が地面を向いている他の動物と違い、「神は、面がみえるように、空へ向けられた顔を人間に与えた」。

痙攣する首の上で、貪るように頭をのばしているのを、
まるで神を非難しているかのように！

2

パリは変わる！ だが私の憂鬱メランコリーのなかでは何一つ
動かなかった！ 新しい宮殿、足場、石の塊、
古い場末町、いっさいが私には寓意アレゴリーになる、
わが愛しい思い出は岩よりも重い。

こうしてこのルーヴル宮のまえでひとつのイメージが私をおしひしぐ。
私は思う、狂おしい身ぶりで、
追放された者のように、滑稽で崇高な、
また、休みなく欲望に苛まれている、わが大白鳥のことを！ そしてあな
たのことを、

アンドロマック、偉大な夫の腕から、
卑しい畜生となって、勇者ピリュスの腕に落ち、
空っぽの墓のそばに陶然と身をかがめている、
エクトールの未亡人、そして哀れ！ エレニユスの妻！

私は思う、泥のなかをゆきなずみ、おびえた獯猛な瞳で、
素晴らしいアフリカの、ここにはない椰子の木を
はてしなく広がる霧の壁の背後に探し求めている
痩せた、肺病やみの黒人女のことを。

けっして、けっして二度と見いだせないものを
なくしてしまった人のことを！ 涙で渴きを潤し
心優しい牝狼の乳を飲むように〈苦惱〉の乳を飲む人のことを！
花々のように干からびてゆく痩せたみなし児たちのことを！

こうして、わが精神の亡命する森のなかで
古い〈思い出〉がりゆうりようと角笛を吹き鳴らす！

私は思う、島に忘れられた水夫たちのことを、
囚われた人、敗北者！…さらに多くの人たちのことを！

九〇 七人の老人

ヴィクトル・ユゴーに

ごつたがえす都市、夢でいっぱいの都市、
白昼、亡霊が通行人をさらい！
力強い巨大な都のせまい水路のなかを
神秘はいたるところ樹液のようにながれ。

ある朝、わびしい通りでは、
霧のために建物の高さがじっさいよりも引き伸ばされ
水かさのました川の両岸そっくりになっていた、
そして、俳優の魂によく似た舞台装置、

よごれた黄色い霧があたりいちめんをひたしていた、そのとき
わたしは、主役のように神経をきりりと引き締めながら、

また、はやくも倦怠している魂と議論しながら、
重い砂利車の通るたびにぐらぐら揺れる場末の町を歩いていた。

ふいに、雨もよいの空の色そっくりな黄色いぼろを着て、
みるからに哀れで、もしもその目に
意地の悪さが光っていなかったら

お布施が雨と降りそそぎそうな、ひとりの老人が

わたしのまえに現れた。あたかもその眼は胆汁のなかに
ひたっていたかのよう。その眼差しは木枯らしの冷たさをつのらせた。
顎髭は長く、まるで剣のように硬く、
ユダの髭さながら、ぴんと突き出ていた。

背なかには曲がっているのではなく、折れていた。その背骨は
脚と完全な直角をなし、

杖が、外見の仕上げにと与えているのは、
かたわの四足獣か、それとも三本足のユダヤ人

といった風情とぎこちない歩きぶり。

雪の泥道に足をとられながらすすむ、

あたかも古靴で死体をふみ潰しているかのよう、

世の中に無関心というよりも、敵意を抱きながら。

うりふたつの老人があとに続いていた。髭、眼、背なか、杖、ぼろ着、

どこをとつても区別のつかない、おなじ地獄から来た者、

この百歳の双子は、このバロックの亡霊は

どことも知らぬ目的地へむかつて同じ歩調で歩いていた。

どんなはしたない陰謀にわたしは狙われていたのだろう、

どんな意地悪な偶然がわたしを辱^{はずかし}めていたのだろう。

なぜなら刻々と、七度、この増殖する不吉な老人を

わたしは数えたのだ！

わたしの不安を笑い、

親密な戦慄にとらわれもしないひとは、

どうかよく想ってほしい、あれほど老いさらばえてはいても、あの七人のおぞましい怪物は永遠の雰囲気を漂わせていた！

わたしは、息絶えることなく、八人目を見つめられたかどうか、皮肉な、宿命的な、情け容赦のない相似、

気味のわるいフェニックス、じぶん自身の息子にして父親。

——けれどもわたしは地獄の隊列に背を向けた。

ものが二重ふたえに見える酔っぱらいのように、怒って

家に帰り、ドアを閉めた。驚愕し、

病みつき、冷え切り、精神は発熱し、困惑し、

神秘とばかばかしさとに傷つけられて！

わたしの理性はむなく舵かじを取ろうとした、

嵐にもてあそばされ、その努力のかいもなかった。

わたしのたましいは踊った、踊った、
帆柱もないまま、ばけもののような、
おいぼれの平底船
果てしない海のうえで！

九一 小さな老婆たち

ヴィクトル・ユゴーに

1

古い首都みやこのまがりくねった壁のなか、
なにもかも、恐怖までもが魅惑に変わる、そのなかで
ぼくは、じぶんの宿命的な気質に従いながら、
奇矯ききょうな、老いさらばえた、魅力的なひとたちを待ちかまえている。

節ぶしのばらけたこれらの怪物もかつては女だった、

エポニーヌやライスリスのような！ うち砕かれた、せむしの、

あるいはよじれた怪物たち、愛してあげよう！ まだ魂ではあるのだから。

——
エポニーヌは、ローマ支配に反抗して立ち上がった反乱軍（六九年）の首謀者のひとりでガリアの豪族サビヌスの妻。
彼女は、夫が死刑を宣告されたのを受け自分も死のうとして皇帝を怒らせ、処刑された。ライスは、古代ギリシャの娼婦
の名。ここでは前者が美德を、後者が悪徳を代表している。

穴のあいたペチコートや、冷たい布地のしたで

このひとたちは這っている、無体な疾風に鞭打たれ、
乗合馬車の走るけたたましさに震えあがり、
そして小脇には、聖遺物のように、
花や謎絵の縫い取りのある小さなバッグを抱えて。

このひとたちは小走りにゆく、まるで操人形^{マリオネット}だ、
足をひきずる者もいる、怪我をした獣がそうするように、
あるいは踊りたくもないのに踊っている者も。かわいそうな呼び鈴なのだ
情け無用の〈悪魔〉がぶらさがりひっばっている！ 毀れ果てているのに、

このひとたちの目は錐のように鋭い、
まるで夜なかに水の眠る穴そっくりに光っている。
輝くものにはなんにでも驚き笑ってしまう女の子のような
神々しい目をしている。

——きみはあまたの老婆の棺が

子どものおなじく小さいことに気づいたろうか？

この似通った棺桶のなかに、博識な〈死〉は、

心をとらえる奇妙な味わいの象徴を置いている。

蟻のように人のごったがえすパリのタフローの凶絵を

ひとりの虚弱な幽霊がよこぎってゆくのを見かけるたびに、

ぼくにはいつも思われる、このひ弱な存在は

あたらしい揺りかごへ穏やかにおもむいているのだと。

とはいえ、幾何学に思いをはせながら、

この動きのばらばらな手足を眺めていると、

これらのからだを容れる箱のかたちをいったい幾度、

職人は変えなければならぬのだろうと考えてしまう。

——あの目は百万の涙でできている井戸、

金属が冷えたあとちいさな煌めきの散りばめられているるっほの坩堝……

敵しい〈不運〉の乳を飲んだ者にとって
あの不思議な目には打ち勝ちがたい魅力がある！

2

今は亡きフラスカティ^⑧の恋に溺れたウエスタ^⑨の巫女。
タレイア^⑩の女司祭、ああ！ 地下に葬られたプロンプターは
その名を知っている。チヴオリの木蔭^⑪がかつてその花で覆った
名高い浮かれ女、

⑧一七九六年から一八三六年までリシユリユー通りにあつた賭博・ダンス場で、ここだけは女性の入場が許されていた。ローマ近郊の別荘地の名を冠したもの。

⑨古代ローマの炉の女神。その巫女は（この詩の女とは違って）処女を守ることになっていた。

⑩ミューズの一人。演劇の女神。

⑪「フラスカティと同じくローマ近郊の町の名。「テイヴオリの木蔭」というのも、夏の野外の踊り場の「木蔭」であると同時に、テイヴオリにある有名なエステ家別荘の庭園を指す。ウエスタ女神の神殿もフラスカティではなくテイヴオリにあった。」（阿部良雄）
夏はクリシー通りで、冬はグルネルサンクトノレ通りで催されていた野外コンサートの名称。

彼女たち皆が私を酔わせる！ けれどもこのか弱いひとたちのなかには
苦悩を蜜に変えながら、こう言った者もいる、
翼を貸してくれる〈献身〉にむかって

「力強い鷲頭馬^{トウマ}よ、私を天へ連れて行って！」

ひとりには、祖国によって不幸の試練にかけられ、
べつのひとりには、夫のために背負いきれない苦しみを背負わされ、
べつのひとりには、じぶんの子どもに刺し貫かれた〈聖母^{メイム}〉、
彼女たちの涙でひとつの大河ができただろう！

3

ああ！ 小さな老婆たちのあとをぼくは追ったものだ！
とりわけそのひとりには、沈みゆく太陽が真つ赤な傷で

は
アリオストが『狂乱のオルランド』に登場させた、鷲の頭をして翼の生えている天馬。

空を血まみれにする時刻、
思いに耽り、人から離れてベンチに腰掛けていた、

金管楽器のゆたかに響くあのコンサート^ぶのひとつつを聴こうとして。
時おり兵士たちがぼくらの公園をひたすあの音楽、
生き返るような心地になるあの金色の夕暮れどきに
市民の心にヒロイズムを注ぐあの音楽を。

この老婆は、いまもまだ背筋はぴんとのび、誇り高く、規律を感じさせながら、
あの潑刺たる戦いの歌を貪^{むさぼ}るように飲んでいた。
その瞳^めはときおり老いた鷲の目のようにひらいた。
その大理石の額は月桂冠にふさわしいように見えた！

4

73 野外コンサート。

こうしてあなた方は苦難の道をゆく、禁欲的に、嘆きも洩らさず、
生命ある都市の混沌をよぎって、
心臓から血の滴る母、娼婦、あるいは聖女、
むかしはその名をだれもが口にしたものだったのに。

あなた方は恩寵だった、あるいは栄光だった、
今やだれひとり見分ける者はいない！ 無礼千万な酔いどれが
通りすがりにひやかすような口説きことばで侮辱する。
卑怯な卑しい子どもがあとをつけて跳ね回る。

おめおめと生きているのを恥じ、老いさらばえた幽霊、
おやおすと、背はかがみ、壁ぎわをゆく。
だれも挨拶もしてくれない、奇妙な運命だ！
あの世の永遠へと熟した、人間の残骸！

けれどもぼく、ぼくは遠くからあなた方を優しく見守る、

不安な目をおぼつかない足どりにひたと向け、
まるであなた方の父親になったかのように、おお驚異よ！
あなた方の知らぬまま、ぼくは秘密の快樂を味わっている！

ぼくには見える、あなた方のうぶな情熱の花ひらくのが。
失われたあなた方の暗い日や明るい日をぼくは生きる。
数を増したぼくの心はあなた方の悪徳すべてを樂しむ！
ぼくの魂はあなた方の美德で燦然と輝く！

廢墟！ ぼくの家族！ おなじ種族の脳髓！

ぼくは毎晩あなた方に莊嚴な別れを告げている！

〈神〉のおそろしい爪にのしかかられて、

明日はどこにいるのか、八十歳のエヴァたちよ。

九二 盲人

あの人たちをよくご覧、わが魂よ。ほんとうにぞっとするじゃないか！
人体模型にそっくり。どことはいえないけれど滑稽で。

夢遊病者のように凄まじく、奇怪で。

その暗黒の眼球をどこへともなくなげかけている。

あの人たちの眼、神々しい火花もそこからは消えてしまい、
まるで遠くを見ているみたいだ。空へ

もたげられたまま。重くなつた頭を敷石のほうへ

夢みがちに傾けるところもついぞ見かけない。

あの人たちはそうやってよぎってゆく、

永遠の沈黙の兄弟である無限の暗黒を。おお都市よ！

おまえが、快樂に溺れて残虐なまでに、

ぼくらのまわりで歌い、笑い、喚いているあいだ、
見るがいい！ ぼくもまた足をひきずり歩いている！ だけど、彼らよりも愚かな
ぼくは言う。「天」に何を求めているんだ、みんなして、この盲人たちは？」

九三 通りすがりの女へ

耳を聳する街路がぼくのまわりで唸っていた。
背の高い、細身の、正式の喪服を着た荘厳な苦惱そのものの
ひとりの女が通り過ぎた、贅ぜいをこらした手で
花飾りと縁飾りをもたげ、揺らしながら。

身ごなしは軽く、気品があり、脚は彫像のよう。
ぼくは飲んでいた、常軌を逸した男のように痙攣けいれんしながら、
彼女の瞳、嵐のきざす鉛色の空のなかに、
魅惑する優しさと人をあやめる快樂とを。

稲妻……そして夜！ —— 束の間の美女よ
その眼差しはぼくをふいに生き返らせた、

きみにはもはや永遠のなかでしか会えないのだろうか。

ほかの場所、ここから遠いところ！ 手遅れだ！ たぶんもうけっして！
なぜならぼくはきみがどこへ逃れるのかを知らず、きみはぼくがどこへ行
くのかを知らないのだから、

おお、ぼくが愛したかもしれないきみ、おお、それを知っていたきみ！

九四 耕す骸骨

1

屍のようなあまたの書物が
古代のミイラさながらに眠る
埃^しっぽいこの河岸^かに並ぶ^ら
人体解剖図は、

古い芸術家の厳肅さと
学識とによって、
たとえ主題は陰惨でも、
〈美〉をかもしだすデッサンだが、そこで

⁷⁴ セーヌ河岸には「ブキニスト (bouquiniste)」と呼ばれる古本商が店を出している。

眼にするのは、この不思議な恐怖を
さらに完璧にするもの、
耕作人のように鋤をふるう、
〈皮をはがれたもの^ぶ〉と〈骸骨〉。

2

おまえたちの掘るこの土地から、
あきらめきった陰気な農奴よ、
おまえたちの背骨や
皮のむけた筋肉の労苦から、
言ってくれ、どんな奇妙な収穫を、
おまえたちはひきだすのか、

は
人間や動物の模型で、皮をはいで筋肉組織が見えるようにしてある。エコルシエ (ecorche)。

死体置場から連れてこられた徒刑囚よ、
どんな百姓の納屋を一杯にしなくてはならないのか。

おまえたちは（あまりにも過酷な運命の
おそるべき、かつ明瞭な象徴！）
示したいのか、墓穴のなかでさえ
約束された眠りはさだかではないと。

ぼくらにたいして〈虚無〉は裏切者だと。
何もかも、〈死〉すらも、ぼくらに嘘をつくど、
そして未来永劫

ああ、たぶんぼくらは

どこかの見知らぬ国で

荒蕪地こうぶちの皮をはぎ

血まみれの素足のまま

重い鋤を押しに行かなくてはならないのだと。

九五 夕べの薄明

これこそは魅力的な夕暮れ、犯罪者の友。
まるで共犯者のようにしのび足でやってくる。空は
大きな婦人部屋のようにゆっくりと閉じてゆく。
こらえ性のない人間は野獣に姿をかえる。

夕暮れよ、いとしい夕暮れよ、おまえを恋しく思うのは
その腕が、嘘偽りなく、こう言える人。今日、
おれたちは働いた！ と。——夕暮れこそは慰めてくれる
野蛮な苦しみに咬み裂かれている精神を、
額が重くなってくる一徹な学者を、
背中をまるめて寝台にもぐりこむ労働者を。
いっぽうで不健康な悪魔が大気のかな
商売人のおもおもしろく目ざめ、

飛び交いながら鎧戸や庇にぶつかっている。

ふく風に悩まされる灯火をぬって

〈売春〉が街路であかりをとす。

それは蟻塚のように出入口をあけ、

いたるところに秘密の通路を切りひらいてゆく、

まるで奇襲を試みる敵兵のように。

〈売春〉は泥濘でいねいの都市のふところであごめいている、

〈人間〉から食べ物をうばう蛆虫のように。

あちこちに聞こえるのは調理場のしゅーしゅーいう音、

劇場のきゃんきゃんいう声、楽団のぶんちやかいう音。

食堂のテーブルでは賭事が面白く、

そこには娼婦や詐欺師やその一党が雲霞うんかのように群れている。

休みもなければ情け容赦もない泥棒たちも、

やがて仕事にかかるだろう、

ドアや金庫を優しくこじあけ

数日は食いつなぎ、情婦に着物をきせてやるだろう。

思いに沈め、わが魂よ、この厳肅なとき、
そしてこの喧噪には耳をふさげ。

病人の苦痛が鋭くなるとき！

暗い〈夜〉が喉元に襲いかかる。病人たちは
じぶんの運命を終え、共同の淵へおもむく。

施療院はかれらの溜息でいっぱいになる。——香りのよいスープを
求めに来る者はもう一人もいないだろう、
夕べ、暖炉の一隅の、いとしい恋人のかたわらに。

そうはいつでも、かれらのほとんどは

一度も家庭の優しさを知らず、一度も生きることがないのだ！

九六 賭博

色もはげ落ちた肘掛け椅子には大年増の娼婦、
肌は青白く、眉を描き、眼には必殺の甘い媚び、
しなをつくり、痩せた耳からは
石と金属のかちかちふれあう音がこぼれてくる。

緑の羅紗ラシヤのまわりには唇のない顔、
色のない唇、歯のない顎、

地獄の熱に浮かされ、ひきつった指で
空のポケットを、早鳴る胸を、さぐっている。

きたない天井の下にずらりと並ぶ青白いシャンデリア
またケンケ灯が、ひかりを投げる。
血の汗ながして稼いだものを浪費しにやってきた

名高い詩人たちの暗い額の上に。

これは夜の夢のなか、ぼくが、ものを見通す眼の前で
展開されるのを見た黒い絵。

ぼく自身、寡黙な巢窟の片隅に、
肘をつき、冷たく、黙りこみ、羨ましがっている我が身を見た、

羨ましがっていた、この人たちの意固地な情熱を、
この年とった淫売たちの不吉な陽気さを。

みんなぼくの鼻先で、嬉々として取引している、
ひとりには古い名誉を、またべつの者は美貌を！

ぼくの心は、ぽっかりあいた深淵へどつと駆けこむ
たくさんの哀れな人々を羨ましく思うことに慄然とした、
かれらは、じぶんの血に酔いしれ、つまるところ死よりも苦痛を
虚無よりも地獄を好みかねない連中だった！

九七 死の舞踏

エルネスト・クリストフへ

じぶんの高貴な姿が生者とおなじくらいに自慢で、
大ぶりの花束とハンカチと手袋を身につけ、
彼女には常軌を逸した痩せた浮かれ女の
屈託のなさや遠慮のなさがある。

舞踏会でこれよりも細いウエストを見た者があるだろうか。
大げさなドレスは女王にふさわしく広がり、
乾いた足のうえへゆったりとなだれおちている、その足を
花のようにきれいな、洒落た靴が締めつけている。

岩に身をこすりつける好色な小川のように
鎖骨のほりだけでたわむれる装飾りは、

ばかげた冷やかかしからしおらしく守っている、
彼女が隠そうとしている陰鬱な魅力を。

深々としたその眼は虚無と暗闇でできている、

その頭蓋骨は、芸術的に花で飾られ、

華奢な背骨のうえでゆらりと揺れている。

おお、くるおしいまでに装飾された虚無の魅惑よ！

肉に酔った恋人たち、人の骨格の

言い知れぬ優雅さを理解しない者たちなら、

おまえを戯画と呼びましょう。

大柄な骸骨よ、おまえはぼくのいちばん大切な好みになつている！

おまえは、その強力なしかめ面で、

〈生〉の祝宴を乱しにきたのか。それともなにか昔の欲望が、

おまえの生ける骸むくろにまたも拍車をあて、

お人好しなおまえを、〈快樂〉の魔宴へおしやっているのか。

ヴァイオリンの歌や蠟燭の炎にあわせ、
おまえはひとを見くだす悪夢を追い払おうと願っているのか、
また、狂宴の激しさをたのんで、おまえの心に燃えている地獄を
涼しいものにしてしまおうという魂胆なのか。

愚かさと過ちの汲めどもつきせぬ井戸！

大昔からの苦悩の永遠の蒸溜器！

おまえの肋骨あはらほねの弓なりにたわむ格子を透かして

ぼくは目にする、いまもさまよう、飽くことのない蝮を。

本当をいえば、ぼくは心配なのだ、きみのコケツトリーが
その努力にふさわしい報いを受けないのではないかと。

いったいどんな人間の心が、嘲笑を理解するだろう。

恐怖の魅力に酔うことができるのは強者だけだ！

恐ろしい考えでいっぱいなの、おまえの眼の深淵から、

眩暈^{めまい}がたちのぼってくる、すると慎重な踊り手は
苦い嘔吐感なしに見つめることはできないだろう
おまえの三十二本の歯の永遠の微笑みを。

とはいえ、じぶんの腕に骸骨を抱きしめたことのない者があるか、
墓のことがらで自分の身を養ったことのない者が。
香水や、衣装や、身繕い^{みつくろい}が何だというのか。
うるさくいうひとは結局じぶんを美しいと思っっているのだ。

鼻の欠けた歌姫よ、あらがえぬ娼婦よ

言っておくれ、気分を害されたふりをしてこの踊り手たちに。

「お高くとまっているのね、白粉^{おしろい}や口紅がどんなに上手でも

あんたたちはみんな、死の匂いがする！ おお、麝香の匂いをふりまく骸
骨たち、

やつれたアンティノウス³、つるんとした顔のダンディ、
ニスを塗った屍、白髪の女たらしのみんな、
死の舞踏が浮き世のすみずみまで揺りゆられ
あんたたちを引っ張ってゆくわ、だあれも知らないところへ！

セーヌ河の冷たい河岸からガンジス河の燃える岸边まで、
人間の群は跳ね上がり、陶然となっている、でも見えないのね、
空の穴のなかの、〈天使〉のラツパが
黒いラツパ銃のように不吉に口をひらいているのよ。

お笑い草の〈人類〉、どんな風土でも、どんな太陽のしたでも、
〈死〉は、身をよじるおまえに見とれ、
しばしば、おまえのように没薬の香りに包まれながら、
おまえの狂乱に皮肉をませあわせているのだよ！」

九八 嘘に寄せる愛

天井にひびき砕ける楽器の歌にあわせ、
いとしい呑気な恋人よ、きみが、調和のとれたゆっくりした
あゆみをとめ、ふかい眼差を退屈そうにさまよわせながら
通りすぎるのを見るとき。

ガス灯の火にいろどられたきみの青白い額、
それは陰鬱な魅力のためにうるわしさをまし、
そこでは夕暮れのたいまつが夜明けをともし、
きみの眼は肖像画さながらに心を惹きつける、それを見つめるとき。

そんなとき、ぼくは思う。なんと彼女は美しい！そして奇妙に新鮮だ！
ひとかたまりの思いが、どっしりした重い塔のように、
彼女の冠になっている、その心は、桃のように傷み、
その体とおなじく、機微につうじた恋のために熟している。

きみはこのうえなく味わい深い秋の果物だろうか。
きみはこぼれる涙をまつ喪の器だろうか、
遠いオアシスを夢みさせる香り、
愛撫する枕、それとも花籠だろうか。

ぼくは知っている、このうえもなく愁いをおびていながら、
大切な秘密をすこしも隠し持たない眼があると。

宝石のはいっていない宝石箱、形見の品がはいっていないロケットロケットきながら、
おお、〈天〉よ、おまえよりもいっそう空虚で、いっそう深い眼があると！

だがきみは見かけであればそれで充分ではないか、
真実から逃げる心を楽しませてやるには。

その愚かさや、つれなさがなんだというのか。

仮面であろうと、舞台装置であろうと、彌栄いやさかに！ きみの美しさを讃える。

ニ
写真や記念の品などを入れて身につけ、装飾にもする金属製の小さな容器。

九九

ぼくは忘れてはいない、街に隣りあい、
小さいけれども落ち着きのある、ぼくたちの白い家。
石膏のポモナポモナと年月を経たヴィーナスが
弱々しい木立のなかに裸の手足を隠し、
夕べには、あふれるみごとな太陽が、
好奇心にみちた空に大きくひらく瞳めとなって、
夕日の束の碎けるガラス窓のむこうから
見つめているようだった、長く静かなぼくたちの夕食を、
質素なテーブルクロスとサージのカーテンの上に
蠟燭のような美しい反射を大きく広げながら。

一〇〇

あなたが妬みをおぼえていたあの心の広い召使い

彼女は慎ましい芝生のしたで眠っています、

ぼくたちは花をいくつか供えてあげるべきでしょう。

死んだ人たちは、かわいそうに、大きな苦しみを抱えています、

それで古い木の枝下ろしをする〈十月〉が

憂鬱な風を墓石のまわりに吹かせるとき、

かれらは生者のことをひどく恩知らずだと思ふにちがいありません、

ぬくぬくとシートにくるまり、じっさいそうなのだけれど、眠るなんて。

ところが、黒い空想にむしばまれ、

添い寝する者もなく、心温まる語らいもなく、

蛆虫に苦しめられている凍った骸骨、

かれらは、冬の雪がぽたぽたと落ちかかるのを感じています、友人や家族が

柵にひっかかっているぼろ布をとりかえようともしてくれないまま、

世紀がすぎてゆくのを感じているのです。

薪がはぜ、歌をうたうころ、夕暮れどき、もしも、静かに、
肘掛け椅子に腰をおろす彼女を見たら、

十二月の青く冷たい夜、

おごそかに、永遠のベッドの奥からやってきて、

彼女がぼくの部屋の片隅にうずくまり、

その慈愛に満ちた目で成長した子どもを包むのを見たら、

この敬虔な魂にぼくは何と答えればいいのでしよう、

くぼんだ瞼から涙がこぼれ落ちるのを見て。

一〇一 霧と雨

晩秋よ、冬よ、春よ、泥まみれの

眠い季節よ！ お前たちが好きだ、ありがたいと思う
こうしてわが心と脳髓を

もやもやした経帷子とおぼろな墓で包んでくれるのだから。

さむい疾風のたわむれるこの大平原で、長い夜な夜な

風見鶏の声も唳れる、ここで、

生ぬるい春のめぐり来る時よりもよく、

わが魂は鴉の翼をおおしく広げるだろう。

不吉なことではいっぱいの、

そしてもう長いあいだ霜のおりている心には、

おお蒼白な季節よ、わが風土の女王たちよ、

お前たちの蒼ざめた闇のいつまでもおなじ眺めほど甘美なものはない、
——ただ月のないある夜、ふたり一組になり
いきあたりばったりの寝台で苦痛を眠りこませるのはべつとして。

一〇二 パリの夢

1

この恐ろしい風景を

人はまだ見たことはない。

そのはるかな茫漠としたイメージが
今朝もなお私を魅了する。

眠りは奇跡にみちている！

奇妙な気まぐれから、

私は、不規則な植物群を

この眺めから追放していた、

そして、おのれの才能を恃む^{たの}画家、

私は、絵のなかで味わっていた
金属と大理石と水の
心酔わせる単調さを。

階段とアーケードでできたバベルの塔、

それは無限の宮殿、

あまたの水盤や滝があり、艶消しのきいた、

あるいは褐色をおびた黄金のなかへ流れ落ちてゆく。

そして水晶のカーテンのように、

重そうな瀑布が、

きらめきながら、

金属の壁に吊るされていた。

眠れる沼は、木々ではなく

列柱に囲まれていた、

そこでは巨魁な水の精が、

女のように、じぶんの姿を映していた。

薔薇色と緑の河岸のあいだに

水面は青々として、

何百万里にもわたり、

宇宙の果てへ広がっていた。

それは聞いたこともない石、

魔法の波。それは

じぶんが映しているもの全てに

目が眩んでいる広大な鏡！

鷹揚に、黙々と、

ガンジス河が、大空のなかで

壺から宝を傾けていた、

ダイヤモンドの深淵に。

わが夢幻の建築家、
私は、意のままに、
宝石のトンネルのしたを
手なづけた海にくぐらせた。

なにもかも、黒い色までも、
磨かれ、澄んで、光彩があるように思われた。
液体はその栄光を
結晶した光線のなかに嵌めていた。

星ひとつ、太陽の
痕跡ひとつなかった、空のどんな低いところにも、
この不思議を照らすものはなかった、
個人的な火できらめいているこの不思議を！

そうしてこの動く驚異のうえを
永遠の沈黙が

天翔けていた（すさまじい新しさ！
一切は目のため、何一つ耳のためではなかった！）

2

炎でいっぱいの目をあけると、
ぞっとするぼろ部屋が飛びこんできた、
そして、頭がはつきりするにつれ、
忌々しい心配事にちくちく胸が刺されるのを感じた。

柱時計が陰気な調子で
乱暴に正午を打った。
空は暗闇を注いでいた
かじかんだ悲しい世界のうえに。

一〇三 朝の薄明

起床ラツパは兵舎の中庭で歌い、
朝風は角燈ツツのうえに吹いていた。

害をなす夢が蜂のように群をなし

褐色の若者を枕のうえでくねらせる時刻。

びくびくして定まらない血走った目のように、

ランプが日光のうえに赤い染みをつける時刻。

ざらついて重い肉体のおもみの下で、魂が

ランプと日光の戦いをまねている時刻。

そよ風にぬぐわれる泣きぬれた顔のように、

空気には逃げ去るものの震えがいつぱいに満ち、

男は書くことに、女は愛することにうんざりしている。

あちらこちらの家に煙がのぼりはじめていた。

春をひさぐ女たちは、鉛色の瞼をして、
口をあけたまま、愚かしい眠りをねむっていた。
貧しい女は、痩せて冷たい乳房をたらしながら、
燃えさしに息をふきかけ、指に息をはきかけていた。
寒さと吝嗇りんしやくのあいだで
陣痛の女の苦しみが高まる時刻だった。
ごぼごぼと吐く血でとぎれる啜り泣きのように
鶏鳴が遠くで朝霧のたちこめる空気を引き裂いていた。
ながれる霧の海は建物をひたし、
死の床にある者は病院の奥で
しゃっくりにむせながら末期の喘ぎを洩らしていた。
仕事に疲れはて、道楽者も帰ってきた。

寒さでふるえる曙が、薔薇色と緑のドレスを着て、
人気のないセーヌ河のうえをゆっくり進んでいった。
そして陰鬱なパリは、まなこをこすりながら、
道具をぐいと掴んだ、この働き者の老人は。

葡萄
酒

一〇四 ワインの魂

ある夕べ、ボトルのなかでワインの魂が歌っていた。

「人よ、きみにむかってぼくは歌う、見捨てられた愛しい者よ、
ガラスの牢獄と深紅の封蠟のしたで、
光と兄弟愛にみちた歌を！」

炎なす丘のうえでぼくの命を産み、そこに魂をふきこむには
どれほどの苦勞と汗と灼熱の太陽が必要か、
ぼくにはよく分かつている。でもぼくは

恩知らずにはならないし、悪さをしようとも思わない、

だって、かぎりない悦びをおぼえるのだ、

仕事でくたびれはてた男の喉に落ちてゆくとき、

その熱い胸は甘い墓
そこは冷たい穴蔵よりも気持ちがいい。

聞こえるだろうか、どきどきするぼくの胸のなかに、
日曜日のリフレインや希望のさえずり。
テーブルに肘をつき、袖まくりして、
きみはぼくを誉め讃え、満足してくれるだろう。

ぼくはきみの奥さんをうっとりさせ、目には火をともしあげよう。
息子には力と血色をとり戻してあげよう、
人生の闘いに出てゆくこのかよわい息子のために
レスラーの筋肉をぐっと引き締める油にもなってあげよう。

きみのなかにぼくは落ちよう、永遠の〈種蒔き人〉が蒔く
貴重な種のぼく、植物のアンブローシア、
ぼくたちの愛から詩は生まれ

珍しい一輪の花のように〈神〉へむかってほとばしるようにと！」

一〇五 屑屋のワイン

風はその炎を叩きガラスをいたぶる、
街灯の、赤い光に照らされ、

古い場末町のただなか、人類が
わきたつ酵母となつてうごめく、泥だらけの迷宮、

そこでしばしば見かけるのは、屑屋の男、やってくる、まるで詩人のように、
頭をふり、つまずき、壁にぶつかり、
警察の回し者など気にもとめずに家来けらい扱い、
立派な計画を抱いた心のたけを吐露している。

かれは宣誓し、至高の法律を發布し、
意地悪な者をたたきのめし、犠牲者を助け起こす、
そして吊るされた天蓋さながらの空のした、
おのれ自身の美德の輝きに酔いしれている。

そうだ、生活の苦悩にさいなまれ、
労働でへとへとになり、寄る年なみに苦しめられ、
すり切れ、廃品の重みに腰もかがまったこの男たち、
巨大な〈パリ〉の混沌たる吐寫物は、

戻ってくる、樽の匂いをふんぷんさせ、
仲間と連れ立ち、闘いのために白髪になって、
顎髭は古い軍旗のように垂れている。
幟のぼりと花と凱旋門が

かれらの前にたっている。壮麗な魔術だ！
ラツパと太陽と叫びと太鼓の
耳をつんざく燦然たる狂宴のさなか、
かれらは栄光をもたらず、愛に酔った民衆に！

このようにしてだ、軽佻浮薄な〈人類〉を貫いて

まばゆいパクトール川^ポ、ワインが黄金を流してゆくのは。
人間の喉をつうじてワインはじぶんの勲^{いさおし}を歌い、
真の王者さながらに、その報償によって支配する。

これら、静かに死んでゆく呪われた老いぼれたちの
恨みを鎮め、無気力をあやしてやるために、

〈神〉は、悔いて、眠りを作りたもうた。

〈人間〉が〈ワイン〉をつけ加えた、〈太陽〉の聖なる息子を！

小アジア、リディアの川。ミダス王が、触れた物をすべて金に変える能力をここで洗い流して以降、砂金を含み流れることになったという。無尽蔵の富の象徴。

一〇六 人殺しのワイン

女房はくたばった、おれは自由だ！
やっとなだけ飲めるつてもんだ。
一文無しで家に帰ると、あいつはがなりたて、
おれは神経をずたずたにされた。

今は王様のように幸福だ。

空気はさわやかで、空はすてきで……

そういえばこういう夏があった

あいつに惚れた頃！

おれを引き裂く恐ろしい渴き

こいつを癒すには必要かもしれない、

あいつの墓をいっばいにできるのと

同じだけのワインが——大げさな話じゃない。

おれはあいつを井戸の底に投げ込み、
そのうえから

縁石もぜんぶ落としかんだ。

——できれば忘れてしまいたい！

おれたちを結びつけ何があってもほどけない
愛の誓いにかけて、

またおれたちが酔っていた美しい頃のように
仲直りをするために、

おれはあいつに会ってくれと頼み込んだ、
夜、暗い路上で。

あいつは来た！ ——狂った女！

おれたちは皆どのみち狂ってはいるのだが！

あいつはまだ綺麗だった、

疲れが見えてはいたけれど！ おれはといえば、
愛しすぎていた！ というわけだ、
おれは言った。この人生から出て行け！ と。

おれのこととはだれにも分かるまい。
馬鹿な酔いどれのうち、一人でも
陰気な夜に、ワインで経帷子を作ろうと
想ってみた者などいるものか。

鉄の機械のように
鉄面皮のごろつきたちは
夏でも冬でも、一度だって、
ほんとの愛つてももの知らない、

愛の暗黒の魅力を、
不安の地獄の隊列を、
毒薬の壇や、涙や、

鎖と骨の鳴る音を！

——さあ、おれは自由でひとりぼっちだ！

今夜はへべれけに酔ってしまおう。

それから、なんの恐いことも悔いることもなく、
地べたに寝転ぼう、

犬のように眠ろう！

石や泥炭を積んだ

重い車輪のついた荷車や、

猛り立つ貨車が

おれの罪深い頭を砕き

まっふたつにおれを切断しても、

そんなことはどうだっていい、〈神〉も、

〈悪魔〉も 〈聖餐台〉もへったくれだ！

一〇七 孤独者のワイン

愛嬌ある女の奇妙なまなざしが
ぼくらのほうへ滑ってくる、なよなよした美しさを
水浴ゆあみさせようとして波うつ月がふるえる湖に
送ってよこす白い光のように。

賭博者の指が握りしめる最後の巾着。
痩せたアドリーヌ^gの奔放な口づけ。
遠くから聞こえてくる人間の苦悩の叫びにも似た
いらだたしく甘美な音色の音楽。

^g バイロンは『ドン・ジュアン』において Lady Adeline という名の下に一人の淫奔な女性を描いたが、ボードレールがこの名を選んだのは caline 「訳中の「甘美な」と韻を踏むためだけだったかも知れない。(クレペール版に拠る阿部良雄の注)

そのどれをとつても、おお、深いボトルよ、
お前の豊穡なお腹が、敬虔な詩人の渴いた心のために
とりおいてくれている沁み入るような香りにはかなわない。

お前はかれに注いでやる、希望と若さと人生を、

——また自尊心という、あの貧乏人の宝を、

そのおかげでぼくらは勝ち誇り、〈神々〉とそっくりになれるのだ！

一〇八 恋人たちのワイン

今日、あたりは燦然と輝いている！
轡^{くわ}も拍車も手綱もなしで、
ワインにまたがり出発しよう
夢幻の神々しい空へむかつて！

ひどい熱病に苦しむ
ふたりの天使のように、
朝の青い水晶のなか
はるかな蜃気楼を追っていこう！

聡明な渦巻きの
翼にのって、ふわふわ揺られながら、

互いの錯乱のなか、

並んで泳ぎながら、妹よ、
ぼくたちは休みなく絶え間なく
逃げてゆこう、ぼくの夢の天国へ！

悪
の
華

一〇九 破壊

ぼくの横で絶え間なく〈悪魔〉がうごめいている。
手応えのない空気さながらぼくの回りを泳いでいる。
そいつを飲みくだすと、肺が焼けるのを感じる、
肺のなかに永遠の罪深い欲望が満ちるのを感じる。

〈芸術〉にたいするぼくの深い愛、それを知っているから、
ときおりやつはとびきり妖艶な女の姿になり、
いかにもいいことづくめのような口実をつくって、
ぼくの唇をけがらわしい媚薬に慣れさせる。

こうして、きそくえんえん 氣息奄々、ひろうこんばい 疲労困憊したぼくを、
やつは神のまなざしから遠いところへ連れてゆく、
深く人気ない〈倦怠〉の平原の真ん中に。

そして、困惑したぼくの眼のなかへ
投げこむのだ、よごれた服や、ひらいた傷口、
それに〈破壊〉の血まみれの道具を！

一一〇 殉教の女

世に知られぬ巨匠のデッサン

香水壘やラメ入りの布、

官能的な家具や

大理石、絵、豪華な襪の裾をひく

香りの沁みたドレスにかこまれ、

生暖かな部屋のなか、温室のように、

空気は危険で、宿命的、

ガラスの棺のなかでは

瀕死の花束が最後の息を吐いている、そこに、

首のない死体がひとつ、赤い鮮血を

河のようにながしている。枕は渴きを潤し、

野原のような貪欲さで

布がそれをがぶ飲みしている。

幽霊から産まれ、ぼくらの眼をからめとる

青白い幻影さながら、

頭は、暗いふさふさした鬣たてがみや

高価な装身具と一緒に、

金鳳花のように、ナイトテーブルの上で

休息している。三白眼の眼からは

考えの空っぽな、薄明のように漠然とした白い眼差しが
こぼれでている。

ベッドのうえでは、しどけなくくつろいだ

あられもない裸の胴体が

自然の贈りものの秘めやかなまばゆさと

宿命的な美を繰りひろげている。

金の縁飾りのついた薄桃色の靴下が

思い出のように、脚に残されている。

靴下留めは、秘めて燃える瞳のように、

ダイヤモンドの眼差しを放っている。

奇妙な眺めだ、この孤独、

物腰も眼もひとしく挑発的な

気だるい大きな一枚の肖像画、この眺めは

暗黒の愛があると教えている、

罪深い愉悦、地獄的な

愛撫にみちた見慣れない祝祭、

悪い天使の群が、カーテンの襞の中を泳ぎながら

それを楽しんでいたのだった。

とはいえ、輪郭のきつい肩の

エレガントな痩せ方や、
苛立っている蛇のように澁刺とした胴と
少し尖った腰を見れば、

女はまだとても若いのだ！——魂が激昂し

五感も倦怠にきりきりと苛さいなまれ

ふと心をゆるしたのだろうか、ゆき場をなくしてさまよっている
渴えた欲望の群へと。

あんなに愛していたのに、生きているときには、

きみには満足させてやれなかった、執念深い男、
かれは、愛想の良いきみの動かない肉のうえで

はかり知れない欲望を満たしたのか。

答えてくれ、不純な屍よ！ きみの硬い編髪こわを

熱にうかされた腕でつかみ、きみを持ち上げながら、
さあ、言え、ぞっとする首よ、きみの冷たい齒の上に

かれは今生の別れをおしあてたか。

——嘲笑う世間から離れ、けがらわしい群衆から離れ、

好奇心旺盛な司法官から離れ、

安らかに眠れ、安らかに眠れ、奇妙な女よ、

きみの不思議な墓のなかで。

きみの夫は世界を駆け回っている、そしてきみの不滅の形は^{フオルム}

かれが眠るときにそのよこで見張っている。

きみと同じくらいおそくかれもきみに忠実でいるだろう、

死ぬまで心変わりしないだろう。

一一一 地獄落ちの女

思いに耽る家畜のように砂のうえに身をよこたえ、
かの女たちは眼を海の水平線のほうへ向ける。
足と足はさぐりあう。近づけた手と手には
甘美な気だるさと苦いふるえがある。

ある女たちは、長い打ち明け話に心をとらわれ、
小川のせせらぐ木立の奥へ、
怯えやすい子ども頃の愛をひとつひとつ口ずさんでゆき、
若い灌木の緑の木肌に彫^えりつける。

べつの女たちは、姉妹のように、重々しくおもむろに
幽霊でいっばいの岩間をよぎり歩いてゆく、

聖アントワーヌ[㊦]が見た場所だ、かれを誘惑する
朱に染まった裸の胸が溶岩のようにわき出るのを。

ほかに、崩れおちる松脂の光を浴び、
異教徒の古い洞窟のむつつりした穴のなかで、
唸る熱から救い出して、と御身を呼ぶ女たち、
むかしの悔恨を眠らせる、バツコス[㊦]、御身を！

またほかに、胸元にいそいそと肩衣^{スカフアリオ}をまとう女たち、
そのながい衣装のしたに鞭を隠し持ち、
暗い森のなかや孤独な夜のなかで、
快樂の唾を苦痛の涙に混ぜる女もいる。

おお生娘よ、おお悪魔よ、おお怪物よ、おお殉教者よ、

[㊦] 聖アントニウス。三世紀から四世紀のキリスト教の聖者。荒野で悪魔から官能をはじめさまざまな誘惑の試練を受けた。
ボードレールと同年生まれの作家フロベールに『聖アントワーヌの誘惑』がある。
[㊦] ローマ神話。酒と狂乱の神。ギリシヤ神話のディオニソス。

現実をさげすむ偉大な精神よ、

無限をもとめる女たちよ、敬虔にして好色な者、

あるときは叫びに満たされ、あるときは涙でいっぱいになる、

きみたちを、ぼくの魂は地獄のなかまで追っていった、

可哀想なきようだい、ぼくはきみたちをあわれみ、愛している、
陰鬱なその苦痛と、鎮めることのできない渴きと、

きみたちの広い心をいっぱいにして、愛の壺のために！

一一二 善良な二人の姉妹

〈放蕩〉と〈死〉は愛想のいい二人の娘、

惜しみなく愛撫をふりまき、健やかさもたっぷりある。

いつも処女の、ぼろをまとったその腹は

永遠の労苦にいそしみながら一度も子を産んだことはない。

不吉な詩人に―家庭の敵、

地獄のお気に入り、実入りの悪い廷臣に―、

墓と売春宿はクマシデの木陰で

いちども悔いがおとずれたことのないベッドを見せる。

棺桶と閨房は冒瀆のことばを豊かに吐きながら

二人の善良な姉妹のように、かわるがわるぼくらに提供してくれる、
恐ろしい快樂とぞっとするような甘美さを。

いつおまえはぼくを埋葬したいのか、穢れた腕の〈放蕩〉よ。
おお〈死〉よ、いつお前はおとずれるのか、妍を競うライバルよ、
相手の悪臭ふんぷんたるミルテ⁸⁸に、お前の黒い糸杉を接木しに。

⁸⁸ 愛の神ヴィーナスの木。糸杉は墓場の木。「シテール島への旅」を参照。

一一三 血の噴水

時折ぼくには思われる、ぼくの血が滔々と流れていく、と。
まるでリズムカルに啜り泣く噴水のように、
どこまでも囁きながら流れていくのが聞こえる。
どこに傷があるのか手探りしてもみつからない。

街をぬい、闘技場のなかを流れるように、
ぼくの血は行く、敷石を島々に変えながら、
生きとし生けるものの渴きをうるおしながら、
いたるところ自然を赤く染めながら。

ぼくはたばかり上手なワインにしばしば頼んでみた、
眠らせてくれ、一日でいい、ぼくを掘り崩すこの恐怖を。
ワインのおかげで眼はいつそうはつきりし、耳はいつそう鋭くなる！

ぼくは恋愛のなかに忘却の眠りをもとめた。
けれども恋愛はぼくには針のマットレスでしかない、
この残酷な娘たち[♀]に飲み物を与えるための！

84
前詩の「放蕩」と「死」を指す。

一一四 アレゴリー⁸⁵

それはゆたかな首まわりの美しい女、
ワインのなかに髪の毛をだらりとひたらせている。

愛の爪も、賭博場の毒も、

その花崗岩の肌にふればなにもかも滑り、切れ味もなくなる。

彼女は〈死〉に笑いかけ〈放蕩〉をからかう。

この怪物たちは、その腕でいつも引つ掻いたり、薙いだりしているが、
破壊的な遊戯のさなかにもかくも敬いはしたのだ
締まってすつくと立つこの躰のいかつい威厳を。

彼女は女神となって歩き、トルコの妃となって休らう。

快樂のなかにマホメットの信仰を持ち、

豊満な胸でいっぱいの腕をひろげ、

眼で人類を呼び招いている。

⁸⁵ この詩全体は売春のアレゴリーである。

この女は信じている、知っているのだ、子を産まない
とはいえ世界の歩みにとってなくてはならないこの処女は、
肉体かいたの美しさは崇高な賜物、
それがあればこそあらゆる破廉恥からも赦しをもぎ取れるということ。
彼女は〈煉獄〉も知らず〈地獄〉も知らない、
そして暗黒の〈夜〉のなかに入る時が来れば、
〈死〉の面おもてをみつめるだろう、
赤ん坊のように、——憎しみもなく悔いもなく。

一一五 ベアトリーチェ

灰まみれの、焼け尽きた、緑のない土地で、
ある日ぼくは自然にたいして不満をぶつけていた、
そして出鱈目にうろつきながら、

思念のナイフを心臓のうえでゆっくりと研いでいた、そのとき
見たのだ、真っ昼間、ぼくのうえに

嵐のきざす大きくて不吉な雲が降りてくるのを。

そこにはいやらしい魔物の群がのっていた、

物見高い残酷な侏儒そっくりのやつらが。

やつらはぼくを冷たく見つめはじめ、

やがてぼくにも聞こえてきた、まるで通行人が

狂人を驚きみつめそうするように、たくさんの合図や

目配せをかわしながら、笑ったり、ひそひそと囁いたりするのが。

——「じっくり見物しようじゃないか、このカリカチュアを。

こいつは目つきも定まらず、髪を風になぶらせ

ハムレットの物まねをしている、ハムレットの幽霊だ。

まったく、哀れを誘うじゃないか、この楽道家、

この乞食、暇をだされた道化役者、このろくでなしは、

芸術的にじぶんの役目を演じる心得があるばかりに、

じぶんの苦悩の歌に驚や蟋蟀こおろぎや

小川や花々の興味をひきつけておきたいのだ。

それに、この手の古い出し物ならこつちが本家のおれたちにさえ、

わめきながら大向こう相手の長ぜりふを朗誦するとは」

ぼくだって、できることなら（わが自尊心は山ほども高く

魔物の雲や叫びを支配下においているのだ）

昂然たる頭をそむけさえすれば済んだだろう、

このいやらしい群にまじって、

なんとという犯罪、太陽がよろめくことはなかったが！

たとえよののない眼をしたぼくの心の女王が目に入らなかつたら。
彼女はぼくの暗鬱な失意と一緒に笑っていた、
そして時々やつらにきたならしい愛撫を注いでいた。

一一六 シテール島への旅

ぼくの心は、浮き浮きと、小鳥のように羽ばたいて、
索具のまわりを気ままに飛んでいた。晴れ渡る空のした、
船は波にゆられていた、
燦然と照る太陽に酔いしれた天使のように。

あの悲しげな黒い島は何？——あれはシテール島、
とぼくらは聞かされた。唄に名高い国、
年とつたやもめ男みんなのありふれた黄金郷。
ごらんよ、どのみち貧相な土地なんだ。

——甘い秘密と心の祝祭の島！
古代のヴィーナスの素敵な亡霊が
きみの海原のうえを香りのように舞っている、
そうして愛と気だるさを精神にたっぷり振るまっている。

緑のミルテ繁る、咲き誇る花でいっぱい、
あらゆる国から永遠に崇められる、美しい島、
賛嘆する心の溜息が
薔薇園のうえを薫香のようにまろびゆくところ

あるいは森鳩の永遠の鳴き声が！

——シテール島はひどく痩せた土地のひとつでしかなかった、
鋭い叫び声に乱される岩だらけの荒地。

とはいえぼくは奇妙なものを垣間みていた！

それは花々を愛する若い女司祭が

秘かな熱にからだを熱くし、

ゆきずりの微風に衣をはだけながらゆく

木陰もふかい寺院ではなかった。

そうではなく、今や海岸のかなり近くをこするように進むと

ぼくらの白い帆に、鳥たちは騒ぎはじめたが、
そこで見たのは三本腕の絞首台、
糸杉のように空から黒く浮き出していた。

凶暴な鳥たちが食い物のうえにとまって
すでに熟した首吊人ががつとばらしていた、
どいつもこいつも、道具のように、その穢れた^{くちばし}嘴を
この腐敗物のぼたぼた血の滴るすみずみに突き立てていた。

目は二つの穴だった、くずれた腹からは
ずっしりした内臓が太股のうえにずるとずり落ちていた、
拷問係のほうは、おぞましい美味に堪能して、
嘴でかれをすつかり去勢していた。

足もとには、^{ねた}嫉みぶかい四足獣たちが、
鼻面をひくひくさせ、ぐるぐる回り、うろついていた。
真ん中のひとときわ大きなやつが

助手に囲まれた死刑執行者のように興奮していた。

シテール島の住人、こんなにも美しい空の子ども、

きみは静かにこの侮辱を堪え忍んでいた

じぶんの卑しい信仰と、

墓に入るのを許されない罪とを贖あがなうつもりで。

滑稽な首吊人よ、きみの苦しみはぼくの苦しみ！

ふらりふらりゆれているきみの手足を見ていたら、

ぼくの歯にむかって吐き気のようにこみあげてきた

むかしの苦しみの長い胆汁の大河が。

きみの前で、かくもうるわしい思い出をもつ哀れな悪魔よ、

ぼくは感じた、かつてぼくの肉を咀嚼するのが好きだった

黒豹や、激痛をあたえる鴉たちの

顎あごのすべて、嘴くちばしのすべてを。

——空は魅力的だった、海は凧いでいた。
ぼくにはいっさいが黒く、血塗られたものになった。
ああ！ ぼくの心は、厚い経帷子に包まれるかのように、
このアレゴリーのなかに埋められてしまった。

きみの島で、おおヴィーナスよ！ 立っているのを見たのは
ぼくの似姿がぶらさがっている象徴的な絞首台ばかり……
——ああ！ 主よ！ わが心と体を嫌悪感なしに
見つめることのできる力と勇気とを与え給え！

一一七 愛と髑髏

古い章末飾り絵

〈人類〉の髑髏のうえに

〈愛の神〉が坐っている。

この玉座のうえで、狂った笑いを浮かべ、

世俗の彼が

円いシャボン玉を陽気に吹くと

空へ昇ってゆく、

まるでエーテル界の底の世界と

もういちど一緒になろうとでもいうかのように。

光にみちたこわれやすい球体は

高く昇り、

割れて、まるで黄金の夢のような

やせっぱちの魂を吐き出す。

ぼくはシャボン玉がでるたびに髑髏が

祈り、呻くのを聞く。

——「この残忍で滑稽な遊びは
いつ終わるのだろう。」

だって、お前の酷い口が

空にまき散らしているのは、

人殺しの怪物め、そいつはおれの脳髓、

おれの血、おれの肉なんだ！」

反逆

一一八 聖ペテロの否認

いったい神はどうなさっているのか、ご寵愛の〈熾天使〉へむかつて
毎日のぼってゆくこの呪詛の大河を？

肉とワインで腹を満たした専制君主のように
かれはわれらの恐ろしい冒瀆の甘美なざわめきを聞きながら眠っている。

殉教者と拷問を受けた者たちの啜り泣きは

きつと心酔わせる交響楽なのだろう、

というのも、その官能のためにどれほどの血がながされても、

天はまだすこしも満足をおぼえてはいないのだから！

——ああ！イエスよ、〈オリーブの庭〉を思い出せ！

単純素朴におまえは膝を折って祈っていた

その相手のお方は、生きたお前の肉に卑しい拷問係が打ちつける釘の音を天にあつて笑つておられた、

お前がじぶんの神性のうえに

やくざな衛兵と料理人たちが唾をはきかけるのを見たとき、

また広大無辺の〈人類〉がそのなかで生きているおまえの頭蓋に茨の棘がずぶずぶとはいつてくるのを感じたときにも。

砕かれたおまえの体の恐ろしい重みのために

両腕はだらりと伸びてしまい、青ざめてゆく額からは

血と汗とが流れていたとき、

おまえがみんなの前に標的のように据えられたとき、

夢をおまえはみていただろうか、あんなにも輝いて美しかった日々を、

永遠の約束を果たしにやってきた日、

花と小枝のまかれた道を、柔らかな口バにまたがり

踏んでいった日、

希望と勇氣に心をふくらませ、
腕をふりまわして下卑た商人たちを鞭打った日、
ついには、お前が主であった日を。槍よりも先に
おまえの脇腹を悔恨が貫きはしなかったか？

——もちろん、おれは、満足して出て行く、
行動が夢の姉妹ではない世界から。

おれは剣を用い、剣によって滅びたい！
聖ペテロはイエスを否認した……あっぱれなやつだ！

一一九 アベルとカイン

1

アベルの裔^{すえ}よ、眠り、飲み、食べよ。
神は汝^{みづか}ににこやかに微笑む。

カインの裔^{すえ}よ、泥のなか
這いまわり惨めに死ね。

アベルの裔^{すえ}よ、汝の生け贄は
〈熾天使〉の鼻をうつとりさせる！

カインの裔^{すえ}よ、おまえの拷問に
いつか終わりはあるのか。

アベルの裔よ、汝の蒔く種と
汝の家畜がふえるのを見よ。

カインの裔よ、おまえのはらわたは
空腹のせいで老犬のように吠えている。

アベルの裔よ、汝の腹を
族長の炉辺でぬくめるといい。

カインの裔よ、おまえの洞窟で
寒さに震えている、哀れなジャツカル！

アベルの裔よ、愛し増えよ！
汝の黄金もまた子を産む。

カインの裔よ、燃える心、
この大きな欲求に用心しろ。

アベルの裔よ、汝は肥えふとり草をはむ
まるでかめ虫のように！

カインの裔よ、道の上
追いつめられた家族を引いてゆけ。

2

ああ！ アベルの裔よ、汝の腐った屍は
けむりたつ土の肥やしになるだろう！

カインの裔よ、おまえの仕事は
充分になされてはいない。

アベルの裔よ、汝の恥辱はこれだ。
剣は猪槍ししやぶに負かされる！

カインの裔よ、天へのぼれ、
神を地面に投げ落とせ！

一一〇 サタンへの連祷

御身、天使のなかにあつてもつとも賢く美しい者⁸⁶、
運命に裏切られ讚美を奪われている神、

おお、サタン、わが長き悲惨を憐れみ給え！

おお、流謫の（プリンセス）、御身はひどいめにあわされた、
だが敗北してもつねにより強くなって立ち上がる。

おお、サタン、わが長き悲惨を憐れみ給え！

⁸⁶ サタンはかつてルシファアという名で天にあり、最も優れた美貌の天使だったが、神の命に背いた罰により地獄へ落とされたという。ボードレーは『火箭』の中で、彼にとつての男性的美の典型のひとつに、英国詩人ミルトンが『失楽園』に描いた反抗するサタンを挙げている。

御身はすべてを知る、地下のものごとの偉大な王よ、
人間の苦悩の親しい治癒者よ、

おお、サタン、わが長き悲惨を憐れみ給え！

御身、レプラを患う者や呪われた賤民にさえ、
愛によって〈天国〉の味を教えてくださいださるお方、

おお、サタン、わが長き悲惨を憐れみ給え！

御身、古なじみの強い愛人、〈死〉から、
魅力的な狂女、〈期待〉を産み出すお方！

おお、サタン、わが長き悲惨を憐れみ給え！

御身、絞首台の回りをかこむ民衆を断罪する
静かで高邁な眼差しを、罪人にめぐむお方、

おお、サタン、わが長き悲惨を憐れみ給え！

御身、ねたみ深い大地のいかなる片隅に
嫉妬深い〈神〉が宝石を隠したのかご存じのお方、

おお、サタン、わが長き悲惨を憐れみ給え！

御身、澄みきった瞳で、金属の民の埋められて眠る
深い武器庫のありかをおみとおしのお方、

おお、サタン、わが長き悲惨を憐れみ給え！

御身、建物の縁をさまよう夢遊病者から
その広い手で断崖絶壁を隠してくださるお方、

おお、サタン、わが長き悲惨を憐れみ給え！

御身、逃げ遅れ、馬の蹄にかけられた酔いどれの
老いた骨を魔法のようにやわらげてくださるお方、

おお、サタン、わが長き悲惨を憐れみ給え！

御身、苦しむか弱い人間を慰めるために、
硝石と硫黄をまぜる術^呪をわれらに教えたもうたお方、

おお、サタン、わが長き悲惨を憐れみ給え！

御身、血も涙もない卑しい〈長者〉の額に、
御身の徴をおく、巧妙な共犯者、

おお、サタン、わが長き悲惨を憐れみ給え！

呪
火薬の製法。

御身、娘たちの目と心に

傷への信仰とぼろ着への愛を植え付けるお方、

おお、サタン、わが長き悲惨を憐れみ給え！

流謫の人の杖、発明家のランプ、

絞首人と陰謀家の告白の相手、

おお、サタン、わが長き悲惨を憐れみ給え！

（父なる神）が黒い怒りにまかせ

地上の楽園から追放した者たちの養父、

おお、サタン、わが長き悲惨を憐れみ給え！

祈り

かつてそこを支配した〈天〉のいと高きところには、御身、サタンに
栄光と讃美、また敗北し、静かに夢みている〈地獄〉のふかきところにも栄光と讃美！
わが魂を、いつの日か、〈知恵の木〉のした、
御身のそばに憩わせたまえ、御身の額のうえに
新しき寺院のごとく、その枝の広がるとき！

死

一一一 恋人たちの死

私たちのベッドはほのかな匂いに満ちるでしょう、
長椅子はお墓のように深いでしょう。
そうして飾り棚には見慣れない花々、
それはもつと美しい空のもと私たちのために咲いた花。

私たちの心は、あらそうように、最後の熱を使い果たしながら、
広やかなふたつのたいまつになるでしょう、
それは、私たちふたりの精神、この双子の鏡のなかに、
二重ふたえの光を映すでしょう。

神秘的な青と薔薇色の夕暮れに
ただ一つの閃光を私たちはかわすでしょう、
別れの思いをこめたながい啜り泣きのように。

しばらくすると、一人の〈天使〉が、ドアをそつと開き、
忠実に、心弾ませ、やって来るでしょう、そしてもう一度
生命をふきこんでくれるでしょう、曇った鏡と死んだ炎に。

一二二 貧者の死

慰めてくれるのは〈死〉、ああ！　そして生かしてくれるのも。
それは人生の目的地、そして唯一の希望、
それは靈藥のように、われらを高め、酔わせてくれる、
そして日暮れまで歩く気力を与えてくれる。

嵐を、雪を、氷雨をぬって、

われらの黒い地平線のうえでふるえている光。

書物[⊗]に書かれた有名な宿屋、そこでは
食べることも、眠ることも、座ることもできる。

⊗ 新約聖書「ルカによる福音書」(Lk. 34-35)に、良きサマリヤ人が旅人を宿屋に連れて行き世話をしやる話が載っている。

それはひとりの〈天使〉、磁気にみちた指のなかに
眠りと、恍惚とさせる夢の贈り物とを持っていて、
また、貧しい裸の人たちの寢床をととのえてもくれる。

それは神々の栄光、神秘的な穀物倉、
それは貧者の財布、いにしえの祖国、
それは未知の〈天〉へとひらかれている柱廊！

一二三 芸術家の死

何度ぼくは鈴を振り、きみの低い額に

口づけしなくてはならないのだろう、陰鬱な戯画カリカチュアよ。

神秘的な的を射るために、

どれほど、おお、わが箠えびらよ、矢を失くさなくてはならないのだろう。

ぼくらは精妙な陰謀に魂をすり減らすだろう、

そしてたくさんの重い骨組みを解体するだろう、

その後、あの大きいなる〈創造物〉をじっくり眺めることになるだろう
ぼくたちはそれを求める地獄的な欲望のためにさめざめと泣いている

のだ！

じぶんの〈偶像〉を一度も知らなかった者たちがいる。

それら地獄堕ちの彫刻家、恥辱の烙印を捺され、

胸と額を槌で叩きながらゆく者たちに、

あるのはたった一つの希望、奇妙な暗い（カピトール⁸⁸）！
それは（死）が、新しい太陽のように空に浮かび、
脳髓から花々を爛漫と咲かせてくれるということ！

⁸⁸ ローマの七丘のひとつ。ジュピターの神殿があり、凱旋將軍は行列を従えこの丘にのぼる風習があった。この詩では、「勝利」、「凱旋」をあらわす。

一二四 一日の終わり

蒼白な光のもと

理由もなく走り、踊り、身をよじる
厚かましく、けたたましい〈人生〉。
それで、地平線に

官能的な夜がのぼり、

なにかかもを、空腹までをもやわらげ、
なにかかもを、恥までも消してくれると、

〈詩人〉は思う、「やれやれ！」

ぼくの精神は、背骨もそうだが、
熱烈に休息をもとめている。

心に忌まわしい夢を抱えたまま、

ぼくは仰向けに横になろう
そしておまえの帳とばりのなかを転がろう、
おお、爽やかな闇よ！」

一二五 好奇心にみちた男の夢

F.N.に⁹⁰

きみも、ぼく同様、味わい深い苦悩を知っているだろう、
そして人にはこう言われるのだろう、「まったく！ 奇妙な男だ！」
——ぼくはいましも死につつあった。恋するぼくの魂のなかで、それは
ぞつとする嫌悪の混じった欲望、とくべつな苦痛。

反逆の気は少しもない、懊悩でありそしてまた生き生きした希望でもあった。
運命の砂時計はますます空っぽになってゆき、
ぼくの拷問はますます鋭く、甘美になっていった。
親しい世界から心はそっくりひきはがされていった。

90 写真家のフェリックス・ナダール(Felix Nadar)。この詩はダグレオタイプの写真撮影を題材にしている。

ぼくは見世物を見たくてたまらない子どものようなようだった、
邪魔物を憎むように、緞帳を憎んでいる子ども……
ついに、冷たい真実が暴露された。

ぼくは驚きもなく死んでいた、そして恐ろしい夜明けが
ぼくを包んでいた。——で、何！ たったこれだけ？
幕はあがっているのに、ぼくはあいかわらず待っていた。

一二六 旅

マクシム・デュ・カンに

1

地図や版画の大好きな子ども、子どもにとって

世界はその広大な食欲と同じ広さ。

ああ！ ランプの光のもと、世界はなんて大きいのだろう！
思い出の眼に、世界はなんと小さいのだろう！

ある朝われらは出発する、脳髓を炎でいっぱいにして、
心を恨みと苦い欲望でふくらませて。

われらはゆく、波のリズムにのり、
限りある海原のうえにわれらの無限をゆすりながら。

ある者は、卑しい祖国を浮き浮きと逃れ。

ある者は、うとましい揺りかごを逃れ。また幾人かは――
女の目のなかに溺れた占星術師――
危険な香りのする横暴なキルケー^ニを逃れ。

獣に変えられてしまわないように、彼らは酔いしれる
空間と、光と、燃え立つ空に。
氷に噛まれ、太陽に赤銅色^{あかがね}に灼かれ
ゆつくりと愛撫の痕跡は消えてゆく。

けれども真の旅人とは出発するために
出発する人。気球さながら、心も軽く、
おのれの運命から片時も離れない。
そして、何故かわからないまま、いつも言っている。さあ、行こう！

欲望が雲のかたちをしている、この人たち、

16
ホメロスの『オデュッセイアー』で、オデュッセウスの仲間が魔女キルケーによって豚に変えられる。

新兵が大砲を夢みるように、夢みている、
人間精神がまだ一度もその名を知らない、
広やかで、変幻する、未知の官能を！

2

われわれは、なんて恐ろしいことだろう！ 独楽こまや鞠まりの
ワルツや跳躍を真似している。眠りのなかでさえ、
〈好奇心〉はわれらを苦しめ、輾轉くんでん反側はんそくさせる、
まるで太陽を鞭打つ冷酷な〈天使〉のように。

奇妙な運命だ、目的地は場所を変え、そうして、
どこにもないから、どこでもあり得る！

〈人間〉は、決して倦むことのない期待を胸に、
休息を求め、いつも狂人のように駆け回っている！

われらの魂はおのれのイカリア^{is}を探す三本マストの船。
甲板に声が響く。「目をあける！」
熱狂した檣楼^{しやうろう}の声は叫ぶ。

「愛：栄光：幸福！」地獄！ それは暗礁だ！

見張番の知らせる島のひとつひとつが

〈運命〉によって約束された桃源郷。

狂宴を張る〈想像力〉が朝陽に照らされ見いだすのは
岩礁ばかり。

哀れ、幻想の国を愛する者！

鎖につなぐべきか、海へ投げ込むべきか、

この酔いどれの水夫、アメリカの発明者、

こいつの見る蜃気楼のために深淵はいっそう苦くなる。

is エーゲ海の島。ボードレールが参照しているのはエチエンヌ・カベの『イカリア島への旅』（一八四〇年）で、社会主義的ユートピアをあらわす。

こうして年老いたさすらい人は、泥のなか足踏みしながら、鼻をひくひくさせながら、輝かしい天国を夢みている。魔法にかかったその目は、シャンデリアがぼろ屋を輝かせてくれるところにはどこにでも「カプー」³³を発見する。

3

驚くべき旅人！　なんて高貴な物語を

ぼくたちは海のように深いその目のなかに読むことだろう！

豊かな記憶の宝箱を見せてくれませんか、

星とエーテルでできた、驚異の宝石を。

ぼくたちは蒸気もなく帆もなく旅をしたい！

ぼくたちの牢獄の憂鬱を晴らすために、

³³ イタリアの町カプア。ハンニバルの兵士たちは「カプアの愉悦」に魅惑されこの町に滞留する危険を冒した。「歓楽郷」の意。

あなた方の思い出を、画布カンバスのように張られたぼくたちの精神のうえに
過ぎゆかせて下さい、水平線の額がくといっしよに。

聞かせて下さい、あなた方は何を見たのですか。

4

「おれたちが見たのは星々と

波。おれたちは砂も見た。

たくさんの衝突や思いがけない災難にも見舞われた、だが、
ここと同じように、退屈することがよくあった。

葡萄色の海のうえの壮麗な太陽の輝きや、

夕日をあびる都市の壮麗な輝きをみていると

おれたちの心には、蠱惑的に照りはえる空のなかへ沈んでゆきたいという
不安な熱い思いがともった。

どんなに殷賑をきわめた都会も、どんなに大きな風景も、偶然が雲によってつくりだす風景の神秘的な魅力を含んでいることは一度もなかった。そしてつねに欲望はおれたちを不安な物思いでいっぱいにした！

——享樂は欲望に力をくわえる。

欲望、快樂が肥やしとなる古い樹木、おまえの樹皮が大きくなり硬くなるにつれ、おまえの枝は太陽をもっと近くで見たくなる！

糸杉よりも生命力のある大木、おまえはどこまでも大きくなってゆくのか？ ——とはいえおれたちは、念入りに、いくつかのクロッキーを摘んできた、きみたちの欲ばりなアルバムのために、遠くから来るものなら何でも美しいと思う兄弟よ！

おれたちは長い鼻をもつ偶像を拝んだ。
輝く宝石をちりばめた玉座を。

匠をこらした宮殿も拝んだが、その幻想的な豪華さは、
きみたちの銀行家にとっては破産をもたらす夢にもなるだろう。

目を酔わせる衣装。

歯や爪を染めた女たち、

また蛇に愛撫される博学な大道芸人も見た」

5

それから、ねえ、それからなにを？

6

「おお、幼い脳髓よ！

一番大事なことを忘れてはいけないな、

おれたちは至る所で見た、求めてそうしたわけではないのだが、
運命の階段の上から下まで、

永劫不滅の罪がおりなす退屈な光景を。

女は、卑しい、高慢な、馬鹿な奴隷だ、

笑いもせずにじぶんに惚れ込み、いけしやあしやあと自分を愛している。

男は、がつがつした、いやらしい、こわもての、欲の皮がつっぱった暴君だ、
奴隷のそのまた奴隷、どぶをながれるどぶ泥だ。

悦ぶ首切り役人や、啜り泣く殉教者。

血が香辛料となり香りをそえる祝祭。

権力の毒は専制君主をいらだたせ、

ひとを愚鈍にする鞭を民衆は愛している。

おれたちのと似たいろんな宗教が、

どいつもこいつも天をめざしてのぼってゆく。〈聖性〉が

羽毛のベッドで転々反側する繊細なひとのように、

釘や獣の毛のなかに官能をもとめている。

おしゃべりな〈人類〉は、じぶんの天才に酔いしれ、
かつてと同じように今も気が狂い、
たけりたつ死苦のなかで、〈神〉に向かって叫んでいる。
『わが同類、わが主、御身を呪う！』

もつとまともなやつ、〈錯乱〉の大胆な恋人たちは、
〈運命〉に囲い込まれた大きな群を逃れ、
はかりしれない阿片のなかへ逃げ込んでいる！
——これが地球全体のいつにかわらぬ報告書——

7

苦い知恵だ、旅からひとが抽ひきだすのは！
世界は単調で小さく、今日も、
昨日も、明日も、いつも、われらにわれら自身の像を見せている。
倦怠の砂漠にある恐るべきオアシス！

出発すべきか。留まるべきか。留まれるなら、留まれ。

出発すべきなら、出発しろ。ひとりは走り、ひとりはうづくまる、

〈時〉という、不吉な警戒怠りない敵を

欺くために！ ああ、休みなく駆け回る者がいる、

さまよえる〈ユダヤ人〉のように、あるいは伝道者のように。

かれらには、汽車も船も、なにひとつ充分ではない、

〈時〉というこのけがれた網闘士^よを逃れるには。べつの者は
じぶんの揺りかごを出ることなくそれを殺すことができる。

ついに〈時〉がわれらの背骨に足をかけるとき、

われらは期待をこめて叫ぶこともできるだろう、前進！と。

かつてわれらが眼を沖に据え、髪を風になぶらせながら

中国へむかって出発したときのように、

われらは〈闇〉の海に船出するだろう
若い旅行者のように心弾ませて。

聞こえるだろうか、魅力的で不吉なあのいくつもの声が
歌っている。「こっちだよ！ 香かぐわしいロータスを

食べたいのなら！ ここで採れるんだ、

きみの心が飢えている奇跡の果物は。

酔っていつてくれ、いつまでも終わらないこの午後の
不思議な優しさに」

聞き慣れたアクセントで、われらは幽霊の正体を見抜く。

あの世にいる親友シスターたちがこちらにむかつて腕を伸ばす。

「あなたの胸を爽やかにしたいのなら、あなたのエレクトラ96のほうへ泳いでいらつ
しゃいー」

⁹⁵ ピュラデスは、従兄弟のオレステスとの間に結んだ友情で名高い。
⁹⁶ エレクトラはオレステスの姉。

と、かつてわれらがその膝に口づけをした女が言う。

8

おお、〈死〉よ、年老いた船長よ、もう潮時だ！ 碇をあげよう！

この国はぼくらを退屈させる、おお、〈死〉よ！ 帆を張ろう！

空や海は墨のように黒くとも、

きみも知るぼくらの心は光線に満ちみちている！

きみの毒をぼくらに注ぎ、元気を回復させてくれ！

ぼくらが望むのは深淵の底に沈むこと、（そんなにもこの火は

脳髓を灼く）、〈地獄〉であろうと〈天〉であろうと、それがどうした、

〈未知なるもの〉の奥底に、新しいものを発見するために！

